

達も、地下に汽笛の音を聞きつゝ、我が事成れりと、ほゝゑんで居らるゝことであらう。

去月廿八日、財部で鐵道の開通式が盛大に行はれた。自分も村人達と共にこの喜びを分つべく、寸暇を偷み遙々東京から馳せ参じた。それにしても國都線の實現に努力して呉れた總ての人達に對して、自分は心から感謝の意を表する。更にこの線路を他に奪ひ去らんと企てた人達に對しても、自分は感謝を禁じ得ない。如何となれば、それ等の策動があつたにも拘らず、今日豫定の開通を見たことは『正しき主張の勝利』であるからである。『正しき主張の前に敵はない』この正しき主張の表現されたのが、我等の國都線である。

越えて二日、四月三十日には亡父の一周忌を營んだ。それにしても汽車の開通を樂みにしてゐた父が、今日の喜びを待たずして、死んで了つたことは、心残りである。もう一年父を生して置きたかつた。さうして父と共に、財部から汽車の初乗りがして見たかつた。

卅五年前に父に連れられて、初めて神戸から汽車に乗つたと同じ様に！

『しつかり勉強して、立派な人間になれ。』といつた父の言葉が今も尙ほ、はつきり耳底に残つてゐる。併し父は、財部から東京まで汽車で行ける今日の日をも待たず、一年前、夙

くも歸り來る日もなく永久の旅に旅立つてしまつたのである。

財部から東京まで汽車の切符が買へることになつた喜び、而も父と共に財部から汽車の初乗りをすることの出來ない悲しみ、ほんとにまゝならぬは人生だ。

理想なき政治

理想なき政治は『形式の政治』であり、『杓子定木の政治』であり、さうして『行き當りばつたりの政治』である。而も我國今日の政治が即ちそれであることを私は悲しむ。

近頃やかましく論議せられてゐる『不戦條約問題』の如き、即ちかうした理想なき政治の現實曝露である。『イン・ザ・ネーム……』云々に口角泡を飛ばすのも悪くはなからう。併しそれよりも前に私達は論議しなければならぬ大切な或物を忘れてはゐないだらうか。

本條約の眞の目的は『國策遂行の爲めにする戦争はしないことにしよう』といふに在る。而もそれは總て現狀に立脚しての立論であり約束である。故に過去に於て資本的帝國主義を眞向に振りかざして盛んに領土を擴張して來た國々にとつては、まことに都合のよい條約である。併し國土徒らに狭少にして、人口のみ多く、その勞力を用ゐるの餘地なきに惱

んでゐる國家にとりては、必ずしも結構だとはいへない。

無論、私達は『不戦』の精神には絶対に賛成するものである。併し自分達の勞力を以てしては、開拓し切れない様な廣大無邊の領土を保有しながら、それを世界全人類の幸福増進の爲めに開放しようとする利己主義の『人民達』によつて果して『不戦』の精神が徹底せられ得るだらうか。私達の眞の理想は『不戦』にあらずして『無戦』でなくてはならぬ。而してそれには、先づ戦争の原因となるべき總てのものを排除しなくてはならぬ。

今日戦争の主因をなすものは『經濟資源の分配』が不公平であるといふことであり、『土地の國際的分配』が公正を得ないといふことである。故に高遠の理想を有する眞の世界的大政治家が我國にあつたならば、今回の不戦條約参加に際し、先づ聲高らかにこの『不合理な現狀』打破を絶叫し、全人類の幸福増進の爲めに最高最大の理想を力説し、以て世界平和の殿堂建設に努力したであらう。然るにそのことなく、今に及んで、たゞ徒らに條文の末技に思ひ悩んでゐるが如きは、實に理想なき政治の大なる悲哀ではないか。

更に拓務省設置にからんだ論議並にその結果が、同じく理想なき政治の現實曝露である

ことを悲しむ。『植民』が『拓殖』に變り、更に『拓殖』が『拓務』に代つて見たところがそれは字句の變化であつて内容の變化ではない。また朝鮮部が省内に獨立して見たところが、形式が複雑になり、事務の進捗を妨げる以外には何等利益のないことだ。而もさうした形式論や、法理論が、尤もらしく論議せられ、且つ尤もらしい假面をかぶつて、さつさと通つて行くところに、日本の特色があるといふならそれもよからう。併しそんな形式論では到底新領土の民心は得らるべきものではない。私達は眞の合理的植民政治を我國に確立すべく、もつと正しく力強い、さうして信念に立脚したほんたうの政治を要求する。

嘗てビスマークは『政府は動搖してはならぬ。その進路が一度、選まれた以上、猶豫なくその方向に向つて進まねばならぬ』といつた。私達は今日の政黨政治に於て特にその必要を痛感する。併しそれには、先づ政治に理想がなければならぬ。……理想なき政治、それは恰も舵なき船が太平洋の浪にさまようが如きものだ。私達は行き詰れる日本の現状を打開すべく、先づ理想なき政治を飽迄排撃する。

大人格南洲先生を憶ふ

明治維新の大業が達成せられて以來まさに六十年、我國の新文化は驚くべき發達を遂げた。然し、その半面に於ては幾多の缺陷を見出すのであつて、今日これを匡救するに非れば、國家の憂を將來に残すことになるであらう。

我國今日の世相を靜かに觀察して見るに、吾人は國家の爲に深く憂ふると同時に、これが匡救の大任を背負つて立つべき大人格の出現を熱望して止まないものである。

云ふまでもなく、明治維新の大業は斯くの如き大人格の出現と、一般國民の憂國的熱情とによつて達成された。それは決して少數者の功績に歸すべきではない。然も、その間最も偉大なる人格の所有者としては大西郷、即ち我が西郷南洲先生を推さなければならぬ。

大西郷は近代日本が生んだ世界的偉人であり大人格であつた。大西郷が城山に晨の露と

消えて五十年、今日尙依然として曉の星の如く光つて見える所以のものは、果して何故であらうか。

明治維新の當時、英傑四方に輩出して人材は雲の如く起つた。故に、その智に於いて、策に於いて、又、その才に於いて、南洲翁は必ずしも拔群の人ではなく、遙かに翁を凌ぐべき幾多の人材が他にもあつたであらう。而も、その間、獨り拔んで南洲翁が光を放つてゐる所以のものは、全く翁の偉大なる人格の現れであると云はねばならぬ。

翁は、常に敬天愛人を以てその生命とせられた。翁の遺訓に

『道ハ天地自然ノモノニシテ、人ハ之ヲ行フモノナレバ、天ヲ敬スルヲ目的トス。天ハ人モ我モ同一ニ愛シ給フ故、我ヲ愛スル心ヲ以ツテ人ヲ愛スル也』

とあり、又、

『人ヲ相手ニセズ天ヲ相手ニセヨ。天ヲ相手ニシテ自ヲ盡シ、人ヲ咎メズ、我ガ誠ノ足ラザルヲ尋ヌベシ』

とあるは、全く、この大精神を表明したるものに他ならぬ。

今、この教訓を默誦しながら眼をつぶり、靜かに翁の人格を空中に描いて見ると、そこに偉大なる人格が髣髴として眼前に現れ来る。そして遂には、廣大無邊の大自然と合致し、宇宙そのものが翁の全人格なるかの如き感じを與へ来る。

この偉大なる人格が二萬の薩南健兒をして死を以つて翁に殉ぜしめた所以であり、又、翁がその尊い生命を、惜しげもなく、彼等の爲に投出した所以のものである。

西南の役は實に、八千の子弟を戦場の露と消えしめた。或は親に別れ子に別れ、或は夫に別れ、親子兄弟枕を並べての戦死は固より、或は家を焼かれ、或は財寶を提供する等、擧げ來ればその打撃實に一通りでなかつた。

現に、自分の父及び一人の伯父は共に負傷し、一人の叔父は出征間もなく戦死し、一人の叔母は二十三歳の若寡婦となつてしまつた。そして四人の子供を女の手一つで養育しなければならぬ運命に置かれたのであつた。

併し、これでも自分の一家は、まだ幸福の部類であつたらう。而も尙、郷黨の間、誰一人として翁を恨む者なく、唯その徳を稱へ、その死を惜しみ、却つて、神の如く敬慕して

ゐるのである。翁の人格また偉大なりと云はなければならぬ。

殊に、一昨年、昭和二年の秋、鹿兒島に於いて舉行された南洲翁五十年祭の盛大であつた實況を親しく目撃した自分は、偉大なる人格は永遠に亡びないものであることを、痛切に感ぜざるを得なかつた。

翁の偉大なる人格は至る處に發露してゐるが、特に、その表れの大きなものの一つとして、今に敬慕惜く能はざるものは、江戸城開渡しに對する、翁の立派な態度である。一代の人格者たる勝海舟と西郷南洲、この二人が會見したればこそ、大江戸が何等兵火の災厄に遇ふことなく、無事なるを得たのである。

當時の感じを勝海舟自ら説明してゐる如く、南洲翁の大なる人格の前には、些かの陰謀術敷を施す餘地がなかつたといふことである。若し、あの場合、我が南洲翁の如き大人格がなかつたならば、江戸八百八町、即ち、今日の大東京市は過ぐる大正十二年九月一日の大震災火災を待たずして、夙くも、六十年前に於て灰燼に歸してゐたであらう。

斯く考へ來ると、翁の人格もまた偉大なりしと云はなければならぬ。

自分は嘗て『英雄出でよ』と題して、我國の現状より見て、英雄偉人の出現を要望し、同時に、南洲翁が明治の初年に於いて、西洋模倣の弊を痛嘆し、將來を戒めたことを論じたことがある。即ち、物質文化の餘弊その極に達しつつある今日、特に吾々は人格の力によつて、國家社會の建直しを爲さねばならぬ時代に到達したことを痛嘆する。

南洲翁は單に西洋模倣を戒めたばかりではない。外交に就いても、自主獨往の精神を以つて臨まざるべからざることを力説された。即ち、翁は、

『正道ヲ踏ミ、國ヲ以ツテ斃ルルノ精神ナクバ、外國交際ハ全カルベカラズ。彼ノ強大ニ畏縮シ圓滑ヲ主トシテ、曲ゲテ彼ノ意ニ順從スル時ハ輕侮ヲ招キ、好親却ツテ破レ、終ニ彼ノ制ヲ受クルニ至ラン』

と稱し、我國外交の根本方針を説いてゐられる。

我國の外交官に果して正道を踏み、國を以つて斃るるの大精神があるであらうか。軟弱外交に非ずんば聲のみの強硬外交であり、終に國家百年の大計を誤るの外何物もないのである。

吾人は獨立の國家を組織して、世界の平和に貢獻せんとするならば、常に戦ふの實力を備へなければならぬ。而して、常に戦ふの實力を備へながら、常に戦はざるの努力を必要とする。戦ふの實力を缺き、戦ふの意志を有せざる國家の選ぶべき道は、唯一つ、衰滅あるのみである。この點に就いて南洲翁は、

『國ノ凌辱セラルルニ當ツテハ、縱令國ヲ以ツテ斃ルル共、正道ヲ踏ミ、義ヲ盡スハ政府ノ本務也。然ルニ、平日、金穀理財ノ事ヲ議スルヲ聞ケバ、如何ナル英雄豪傑カト見ユレ共、血ノ出ルコトニ臨メバ、頭ヲ一處ニ集メ唯目前ノ苟安ヲ謀ルノミ。「戦」ノ一字ヲ恐レ政府ノ本務ヲ墜シナバ、「商法支配所」ト申スモノニシテ更ニ政府ニハ非ザル也』

といひ政府者の心得を明示してゐられる。

然るに、現今我國の外交が英米に對する追隨外交となり、独自の主張なく、その日暮しの感あるは、我國の政府が所謂『商法支配所』に成り下りつつあるが如き憾なしとしない。

更に、我國の政治の現状から考へて見ても所謂人格政治の確立が今日の急務なりといはなければならぬ。南洲翁は夙に、

『廟堂ニ立チテ政治ヲ爲スハ天道ヲ行フモノナレバ些カトモ私ヲ挾ミテハ濟マヌモノ也』

と稱して朝に立ちて政治を行ふものの心得を説いて居られる。

金權政治と陰謀政治とを以て始終一貫せるが如き今日の政治家、國利よりは黨利、民福よりは黨略、政黨あつて國家あるを忘れ、黨人あつて國民あるを忘れたるが如きが昨今の政界である。果して廟に立つものに天道を行ふの誠意ありや。果して大政を爲すに當り私心なき大人格者ありや。

『命モ要ラズ、名モ要ラズ、官位モ金モ要ラヌ人ハ始末ニ困ル者也。コノ始末ニ困ル人ナラデハ困難ヲ共ニシテ國家ノ大業ハ成シ得ラレヌ也』

と南洲翁は云つてゐられるが、南洲翁自身がこの『始末に困る人』であつた。翁は參議陸軍大將近衛都督の地位を弊履の如く投棄て、郷里鹿兒島に歸られた。そして、吉野の原に土まみれになり、汗みどろになつて農業を營み、終には、その尊い生命まで郷黨子弟の爲に抛つた。こんな離れ業は大臣、宰相を唯一の目的とする現代政治家の到底爲し得べき處ではない。即ち斯くの如きは、至誠一貫、世の毀譽褒貶を顧ず、常に身命を投出して

國家民人の爲に盡さんとする大人格にして、始めて爲し得べきところである。

以上、南洲翁に關し、自分はその人格の一端を批評して見たのであるが、無論、世間には南洲翁に對していろいろの批評がある。殊に、南洲翁が西南の役を惹起したる責任者であるが故を以つて、彼是云ふ者がある。然しながら、このことがあるにしても、南洲翁が近代不世出の英雄であり、大人格者であることに於ては何等變るところがない。

自分は先程述べた様に、自分の父が翁に従つて所謂賊軍として戦つた一人である。それ故、ここでは彼是辯護がましいことを云ふことは差控へたい。而も、英雄にして始めて英雄の心事を了解するといふならば、勝海舟が南洲の心事を詠じて、

亡友南洲氏。 風雲定大是。 拂衣故山去。 胸襟淡如水。
 悠然事躬耕。 嗚呼一高士。 只道自居正。 豈意紊國紀。
 不圖遭世變。 甘受賊名訾。 笑擲此殘骸。 以付數弟子。
 毀譽皆皮相。 誰能察微旨。 唯有精靈在。 千載存知己。

といつてゐるが、これが最もよく全豹をうがつたものと云はねばならぬ。而も、尙南洲

翁を批難せんとするならばそれは勿論隨意である。凡て、人間は偉大なる處もあれば缺點もあるものである。神でない以上、全智全能を人間に要求することは出来ない。

吾々は人に勝れた點を取つて以つて、自己の修養の資料とすればそれで足りる。況んや南洲翁の心事は公明正大であつた。何等國紀を紊るの意志のなかつたことを識るに於いて更に、吾々の崇高の念を阻害するものでない。

最後に、南洲翁の心事を知るの便に供せんが爲に、文久二年に翁が三十六歳にして沖永良部島に貶謫された際、獄中所感を述べられた詩を録することにする。

朝蒙恩遇夕焚坑。 人生浮沈似晦明。 縱不回頭光葵日向。
 若無開運意推誠。 洛陽知己皆爲鬼。 南嶼浮囚獨竊生。
 生死何疑天附與。 願留魂魄護皇城。

——昭和四・八——

佐渡ヶ島から

来いといふたとて行かりよか佐渡へ

佐渡は四十九里波の上

去る六月の初旬であつた、佐渡の青年達が、わざわざ東京までやつて来て、八月初旬開催の農民夏期大學に出演方を懇請した。今日まで佐渡から度々申込を受けたが、何時も都合が付かずに断つた行きが、りもあり、今回は萬難を排して行くことに承諾した。

その約束を果すべく、去る三十日の夜東京を出發して、三十一日の朝新潟に着いた。然るにその日の午後出帆の定期船が、故障の爲め休航となつた。これでは萬事休すだ。いくら来いといふたとて船無しでは行く譯には参らぬ。それにしても、今日中に行かねば、明日の午前から開講の豫定がすつかりくるつてしまふ。そこで電報で先方に交渉して見ると

どうしても今日中に新潟を立つて呉れ、それが五百に餘る聴講者の熱烈な希望だといふ。よろしい、わしも男だ、渡る決心さへすれば、途は自から開けるだらうと返答した。

總て發動汽船一隻雇ひ入れた。船の名は『第一昭榮丸』二十五噸に足らぬ扁舟だ。午後四時には、一身の運命をこの扁舟に托しつゝ、新潟の港を船出した。兩津港まで三十五海里、夏の海は静かだといひながら大浪もあり、船も揺れた。殊に西北の風が強く吹いて思ふ様にスピードが出ない。

年若くして骨格たくましく船長は、男性的な『佐渡おけさ』を聲高らかに唄ひながら、しつかり舵を握つてゐる。夕日は、やがて大佐渡の山のかなたに没し去り、紺青の海は、だん／＼夜の幕にとざされて来た。佐渡に近き海一面には無数の『烏賊つり舟』がかぶり火をたいてゐるのが如何にも美しい。さうした中を走り走つて昭榮丸は遂に航海五時間餘にして九時二十分、兩津港の棧橋にびつたりと横付けになつた。こゝまで迎ひに来て呉れた青年達の眼は確に『感謝』と『安心』とに輝いてゐることが、夜目にもそれと窺ひ知られた。

波の上でも船さへあれば

越して苦もない佐渡ヶ島

翌八月一日には豫定通り、午前、午後六時間に互り長講二席を辨じ、眞剣な農村の青年達と農村問題と移植民問題とを論議した。

人口十二萬、その過半は農民である。十八萬石の米が島人の熱心な努力によつて生産せられ、數萬石の島外移出をしてゐるといふのが、佐渡の實狀である。純然たる小作農を殆んど有しないといふ佐渡ヶ島、米作を主とする自作農、米によつて立てられた農家經濟：それだのに今日の米價下落、これでは佐渡の農業は立つて行かぬといふのが、彼等の叫びである。

併し、この痛烈な叫びは敢て佐渡農民のみの叫びではない。これは日本全國、全農村の叫びである。佐渡はこの點に於て日本全國の縮圖だ。政府當局には、この痛烈な農民の叫びが聽えないのか。それとも聽いても聽かない振りをしてゐるのか。……米の値はまだ困る程安くないと、空うそぶいてゐる役人は一體どこの役人だ。

講演を済して佐渡名物の謡曲を聞いた。……百姓達が鎌を片手に謡曲をうなるといふ風流な佐渡の島人ではないか。

佐渡はゆかしい謡ひもうたひ

鎌を取る手に舞ひもする

夜に入り名物の『おけさ節』の唄に踊に、佐渡情調を思ふ存分味はひ得たのは特にうれしかった。

佐渡のみやげにおけさを習ふて

唄ひ出す度び思ひ出す

斯くて二日は、早朝自動車を驅つて、史蹟に富んだ佐渡を見た。殊に罪無くして配所の月を眺め給ひし順徳帝の眞野山陵に詣で、は、感慨無慮、去るに忍びなかつた。

眞野の御陵松風さえて

袖に涙のむら時雨

午前九時、この身を乗せた第八佐渡丸は靜かに兩津港の棧橋を離れ、新潟に向け出帆し

た。海も静かだ。この分なら明三日の午前九時には、東海道御油の海濱で開會中の夏期大學の演壇にも間違ひなく立つことが出来よう。さようなら佐渡の島山、さきくあれ！

三十五反の帆をまきあげて

習ふたおけさで佐渡を出る

— 昭和四・八・二 —

忘れえぬ姉

名もなき野邊の花一輪でさへ、我等に無限の眞理を教へる、故に宇宙の森羅萬象は悉く我等の師表である。

明治二十七年の春三月、自分は郷里財部の小學校を卒へ、農學を志して上京することになった。出發に先だち、一週日を日當山温泉に過した。その頃、清水村にゐた姉の濱子がよくやつて来ては、何かと世話をして呉れた。明日は財部に歸るといふ日の夕方であつた。自分は姉の歸りを送つて温泉宿を出た。さうして、新川に添うて下ること約三町、『くわんじん橋』……乞食橋……のたもとまでくると、姉は立ち留つた、さうして言つた。

『いよ／＼別れの日が來た。今日は亡き母君に成り代つて、いひ聽かすことがある』……姉の眼は露を帯びてゐた。……『お前の東京行に就て、世間には色々の噂がある。中には、

十四の子供をたつた一人で、東京にやる親の氣が知れぬ。どうせ都の風に吹かれて、道樂者になる位が關の山だらうと、けなす人さへある。この噂が當るか當らぬか、それはお前の奮發一つだ。萬一學業成らずして、空しく歸つて來るやうなことがあつたならば、この姉が一步も足を門内に踏み入れさせませぬぞ』……姉は嚴として強く云ひ放つた。併し彼女の女の頬には熱い涙がとめどもなく流れてゐた。斯くて姉は後をふりかへりく橋を渡つて行つた。自分は姉の姿が夕靄に包まれて見えなくなるまで、その後姿を見守つた。

自分が父に送られて上京の途に就いたのは、それから二週間の後であつた。爾來三十年五年の今日まで、或は東京に、札幌に、臺灣に、海外に幾多の學者、先輩、偉人、乃至大自然に學ばぬ日とは一日もない。併し中にも忘れ難きは、その日の姉の言葉であり、教へである。

『くわんじん橋』は、今も昔のまゝに残つてゐる。併し姉は、もうこの世の人ではない。果無きは人生、尊きは教訓！

二つの思ひ出

臺灣總督府の命に依る獨逸二箇年の留學を無事に終へ、歸路を亞米利加に選んだ筆者は、明治四十五年の一月元旦をワシントンに迎へ、共和國首都の新年を物珍らしく眺め、その日の午後には、早くもフィラデルフィアのホテル・アルデンに到着した。

折からこの地滞在中の新渡戸先生と、一週日を共に送り、見學上幾多の便宜を得たことなどを考へると、今でも忘れることの出來ない多くの思出がある。今その一つをこゝに書いて見る。

一月五日の朝、筆者はフェアマウント・パークの見物に出かけた。前日來小やみなく降り續けてゐた雪が、その日は更に大降りとなつてゐた。おまけに寒さが俄かに加はり、會ふ人毎に『大分お寒う！』と挨拶するといふ有様。その寒さと、その雪とを冒しての公園

見物、物好きにも程がある。併しそれには大に理由があつた。

人も知る如く、費府はペンシルヴァニア州の首府であり、そのペンシルヴァニア州を創設したのはウキリヤム・ペンである。ペンは植民の初めに當り、或日荒蕪たる原野の眞只中に、巨人の如くつき立つた楡の木蔭に、土人の酋長達を集め、最初の會見を遂げた。その歴史的場所が、今日のフェヤマウント・パークである。筆者が寒さと雪とを物ともせず、特にこの公園を訪れたのは、自ら楡の木蔭にたゞすみながら、ペンの氣持になりすまして、在りし日の面影を偲んで見たかつたからである。

膝を没するやうな深雪をかきわけながら漸く公園にたどり着いて見ると、折からの吹雪に、冬枯の巨木楡は頻りに枝を鳴らしてゐる。その鳴音に筆者は、ウキリヤム・ペンが、酋長達と會見の際試みた演説の一節を思ひ浮べた。

『吾等はここに、信用と親睦との大道に會した。吾等は相互に間隙に乗することなく何事も公明と慈愛とを以て交はらう。予は汝を子と呼ばぬ、何となれば、親は時に子を責めて、その度を超ゆることがあるからである。又汝を呼ぶに兄弟を以てしない、何と

なれば、兄弟も互に相関ぐことがあるからである。予と汝等との交情は、これを鎖に譬ふるを欲しない、何となれば、鎖は露の爲めに錆び、倒木の爲めに切斷せらるゝことがあるからである。吾等は恰も一身同體を二つに分離したやうなもので、その實一つの肉であり、且つ一つの血である。』

ウキリヤム・ペンは斯く叫んでゐる。ペンのこの心持をよく體得せるものにして、初めて植民地統治に誤りなき鐵案を下し得るであらう。即ちペンのこの氣持は『一視同仁』の精神だ。併し、一視同仁の眞意は『同化』でもなければ『劃一』でもない。同じからざるものは、先づこれを破壊して改造するといふのではない。又同一ならざるものを容るゝに同一の容器を以てせよといふのではない。『差別則平等』そこに自から、ペンの會得した大哲理がある。

筆者は、耳を切るやうな吹雪の中につゝ立ちながらも、一度この演説に思ひ及ぶとき、期せずして若き血潮の高鳴を感じ、雪中をも忘れ、自からこの身の温かさを覺えた。『冷たき法律よりは、温かき人間味』これが異民族統治の要諦でなくて何であらう。

植民地統治策の眞の根幹は、『法律學』にあらずして、『生物學』であり、『政治學』にあらずして、『心理學』である。吾等がこゝに思をめぐらすとき、そこに初めて、異民族統治上一種の新哲學を發見し得るであらう。

雪中の公園見物、考へて見れば物好きな話だ。併しこの物好きな見物の間に、自から異民族統治の大哲理を發見することが出来るといふならば、決して無駄ではない。筆者は、かう考へながら、ホテルに歸つて來た。さうして温かいストーブにあたりながら、尙も異民族統治の大問題を考へ續けて見た。三千里外異郷の客舎に、たゞ獨り靜かに祖國の將來を考へて見た。

歲月流るゝが如く、それから、もう十九年も經過した。併し我國の植民政策には、何等の變化がない。たゞちがつて來たのは、植民地の實情であり、その思想である。昭和も五年となつた我國の爲政者中、植民地統治の大哲理を眞から會得してゐる人が果して何人あるだらう。斯く考へるとき、筆者は更にもう一つの思出を書かざるを得ない。

歸朝後依然として臺灣總督府に腰辨生活を續けた筆者は、或時東部臺灣に出張した。さ

うして大火災後の花蓮港市街を物珍らしく見て歩くうち、弘法大師と藝者屋らしいものが、新築の二軒長屋に隣してゐるのを發見して、妙な取組みもあつたものだと思つた。

その晩或宴席で、筆者の前に坐つた一人の藝者に、晝間の疑問を解くべく質問を試みた。ところが偶然にもその者は、筆者が晝間藝者屋とにらむだうちの藝者であつた。さうして、彼の女は、次のやうな面白い話をして呉れた。

この長屋に後から引越して行つた藝者屋の女將が、お隣の坊さんのところに挨拶に行つた。

『とんでもない者がお隣に参りまして、さぞ御迷惑で御座いませうが、どうか我慢を御願ひ致します。』

女將の挨拶は、かうであつた。ところが、坊さんの挨拶が頗ぶる振るつてゐる。

『どう致しまして、お互様です。線香でやる商賣に變りはありません。たゞ違ふのは、あなたがチンチン、わたしがカンカン……たゞそれだけです。何の御遠慮があるものか、うんと精出しておやんなさい。』

名もなき田舎藝者が無意識に話して呉れたこの物語、何でもない様な話ではあるが、筆者は植民地統治上一大眞理を教へられた様な気がして非常にうれしかった。

入口にかけられた弘法大師の提燈も、何々屋と染め出された藝者屋の提燈も、提燈なることに於て何等の變りがない。ましてその中に燃えてゐる蠟燭に甲乙のあらう筈がない。更に奥深く這入つて見たとき、佛壇の前に立てられた線香でも、藝者屋の隅に立てられた線香でも、燃え上るその煙に二つはない。たゞ異なるのは三味の音と鐘の音ばかりである。チンチン、カンカン、たゞそれ丈けである。併しそれさへ聴き様によつては同じ音色に聴えることもあらう。

總てはチンチン、カンカンの世の中だ。表看板丈けを見て、總てを律してはならぬ。吾は看板に染め出された文字のみを見て、その内容を速断してはならぬ。同じに見えて、その實相異なるものがあり、相異なるが如く見えて、その實相同じきものもあるのが世の中だ。近い如うで遠く、遠い如うで近いのが世の中である。

植民地經營の重任に當るものにこの悟りがなければ、異民族統治の大任を全うすること

は出来ない。植民地經營の基準は、單に提燈のかけ換へを行はんとするが如き同化政策にあらずして、異中同を發見するの政策でなければならぬ。即ち線香の煙を立てながら、相異なるチンチン、カンカンの妙音により、自から相和すべき一つの極致點を發見するのが、異民族統治の眞諦である。

野邊に咲く名もなき花の一輪でさへ、吾等に無限の眞理を教へるものだ。雪深き北米の思出、更に災熱焼くが如き南島の思出……この二つの思出に筆者は、植民地統治上偉大なる教訓を發見するものである。

好親却て破れん

倫敦會議の問題は、過ぐる特別議會に於ても、可なり八ヶ間敷く論議せられた。而も今尙ほ盛んに毎日の新聞を賑はしてゐる。恐らくこの問題は、當分我國の政治問題として、その中心を成すものであらう。

而して、今日この問題論議の中心を成すものは、統帥權の問題である様である。無論統帥權の問題は大切に相違ない。併し自分は嘗て本誌上で不戰條約問題に就て論じた場合にも述べたが、どうも我國の政治家達は、何れの場合に於ても、餘りに法理論に因はれ過ぎる。従つて形式論に因はれて、却つて問題の本質に觸れない場合が少くない。自分はこの問題に就て、政府と軍部との關係がどうなつて居るかを彼れ是れ論じようとは思はぬ。それよりも、もつと根本にさかのぼつて、本問題に就て一二所感を述べて見たい。

「國防は外交にあらず」といふ議論もある。併し時世が進み、軍備制限が、列強間に平和條約に依て締結せらるゝことになつた今日、國防が外交的手段によつて左右せらるゝもの止むを得ない。但し國防は飽迄自主的でなければならぬ。國家の生存權を安全ならしむるに必要な最少限度の國防は誰が何といつても、之を維持しなければならぬ。故に一國の外交が國防問題に関する限り、これが外交の任に當る責任者は特にこの大精神に終始一貫しなければならぬ筈だ。然らば果して今日の外交當局者に、この大精神があるだらうか。演口内閣に果してこの大自覺があつて初めて倫敦會議に對するあの回訓を發したのであらうか。そこに自分は大なる疑問なきを得ない。

我國の全權は「對米七割が我が國國防の最少限度だ」と東京に於て、ワシントンに於て、更にロンドンに於て高唱力説してゐた。然るに彼等が調印した條約は、その所信を貫徹するに至らなかつた。そこに、今日の問題が残されたのである。

幣原外相は過ぐる特別議會に於ける演說中、倫敦會議に論及し、「此際我々として倫敦條約が恰も未來永遠に我が國家の行動を束縛するものゝ如き虞を抱き、此推測の下に、餘り

に神經過敏なる態度を示すやうなことがありましては、如何にも自信ある國民の態度に相應はしからぬことであると申さなければなりません。成る程外相のいふ通り、本條約は一九三六年迄の期限であり、それ以後は何等の束縛を受けるものではない。故に理論上よりいへば、一九三五年開催の會議に於て、如何なる要求でも主張し得る自由の立場が保留してあることになる。併し期限付の條約が期限經過後にその效力を失ふは當然のことであつて、何も外相の説明を俟つ必要はない。只だ我々の憂へるのは五年後の實際問題である。今日でさへその主張を貫徹し得なかつた我國が五年の後、而も米國は新しく建造された新進氣鋭の大巡洋艦を擁するに至つた場合に、どうしてその主張を遺憾なく貫徹することが出来ようぞ。

幣原外相は、この點に對する我等國民の憂ひを『神經過敏』だと非難せらるゝが、外相に果して五年後に於て我國の主張を立派に貫徹するの確信ありや、御伺ひ致し度いものだ。たゞ今日の憂を明日に繰り延べ以て自ら一日の安きをぬすむが如きは、我等の斷じて許し得ないところである。

更に外相は『今回の倫敦條約の規定の中には我々が交渉の決裂を賭しても争はなければならぬ程のものがありませんのでありまして、我々としては、及ぶ限り列國と協力して會議の成功を圖るべき立場に在つたことは、必ず公平なる觀察の一致する所であると考へます』と主張してゐる。

最初全權達が主張した如く、又海軍々令部が今日尙ほ主張してゐる如く、我國の國防上の最少限度が對米七割であり、それ以下の兵力量では國防上遺憾なきを期し難いとするならば、それまでも犠牲に供して條約を成立せしむるの必要がどこにある。國家百年の大計を期する上に於て、東洋の平和を永遠に確保する上に於て眞に我國の主張が正しいとするならば、決裂を賭してもこれを主張しなければならぬ筈だ。我全權に此の決心あり、我政府にこの大精神があつたならば、決裂を俟たずして、我れの主張は貫徹し得たであらう。又假に決裂を見たとしても、その責めは彼の荷ふべきものであつて、我の關するところではない。然るに政府が、この大英斷に出でず、只徒らに列國協調の美名に因はれ、この不満足な條約に調印せしむるに至つたことは實に千秋の恨事である。

無論世界の平和を維持する上に於て、列強間の協調に最善の努力を拂はねばならぬことは論ずる迄もない。併し乍ら、物には程度がある。その程度宜しきを得ない場合には、そこに大なる缺陷の生ずべきを忘れてはならぬ。

西郷南洲翁は、嘗て外交の要論を説いて『正道を踏み、國を以て斃るゝの精神無くば、外國交際は全かる可からず。彼れの強大に畏縮し、圓滑を主として、曲げて彼れの意に順従する時は輕侮を招き、好親却て破れ、終に彼れの制を受くるに至らん』といつて居られる。現内閣諸公及全權達は、今回の倫敦會議に際し、果してこの精神を以てのぞまれたであらうか。

圓滑を主とし、列強間の協調を計るの必要は無論のことだ。併し、徒らに彼れの強大に畏縮してはならぬ。更に『好親』を目的としたところが、協調第一主義に偏し自主の大精神を忘れ、曲げて彼れの意に服従するに於てはその結果得るところのものは、たゞ『輕侮』あるのみだ。國防の最少限度までも、列強協調の犠牲に供した倫敦條約は、正にこの類ではなからうか。而も遂に彼れの制を受くるの日至らんか、この光輝ある祖國日本の將來を

何とする。

『正道を踏み、國を以て斃るゝの大精神』なき外交は、眞に國家の禍である。國防危ければ、好親却つて破れん。自分は倫敦會議の結果に鑑み、我が國民精神の上に大きな缺陷のあることを發見し、衷心悲しみに堪へざるものである。

倫敦の思ひ出

筆者が臺灣總督府から獨逸留學の命を受けたのは、明治四十二年の春であつた。出發に際し、G男爵は、何呉れとなく滯歐中の心得を親切に教へて呉れた。さうして最後にいつた。「向ふに行つたら、時の許す限り、何でも見、何でも聞き、何でもするといふことにし給へ。將來人の話を聞き、人の報告を読んで、正しい判断をするには、かうした心がけが一番大切だ。自分が未熟ながら國務大臣として、今やつて行けるのは、この心がけで、やつて來たからだ。君の將來を考へて見てもそれ以外にはないか。」

男爵の注意は、筆者自身の考へと、まことによく一致してゐた。即ち「日本で見られない者を見、聽けない事を聞き、出來ないことをやつて來る」といふのが筆者の考へであつた。故に筆者は滯獨二ケ年間は無論のこと、残りの一ケ年間は各地を旅行して廻つたが、

何れの國、何れの場合に於ても、この方針で研究もし、視察もした。従つて全国各地の盛場も、一通りはそのぞいて見た。併し、盛場を中心とした二十年前の思ひ出を、今更事新しく書き立てて見る氣にもなれないから、たつた一つ倫敦滯在中の思ひ出を書くことにする。

獨逸二ケ年の留學を無事に終へた筆者は、「英吉利及英吉利民族」研究の爲め、二ケ月を倫敦に暮した。何事も研究だといふので或晩同宿のT君と倫敦第一の盛場ともいふべき、ピカデリーの見物に出かけた。

ピ街のことは餘りに有名である。故にその實況を更めて詳しく書く必要はない、亦た書かうとも思はぬ。併し、夜の九時頃から、十二時頃にかけてのピ街は、丸で芋を洗ふような混雑である。賣らんとする魔性の女、買はんとする本能の男、絃々相摩しつゝ、右往左往してゐるその有様は、確に天下の奇觀である。而もその間、何時とはなしに、兩者の取引が立派に成立し、それぞれ落ち付くところに、落ち付いて行くといふのだから、驚かさるを得ない。

人間が神でない以上、何人にも人間としての弱點はある。この弱點が人間から取り除か

れない限り、どんな文明國でも、性的暗黒面の存在は止むを得まい。紳士國を以て世界に誇る英吉利でも、この醜惡な實在を認めざるを得ないところに、人間界の大きな悩みがあるのだと考へた。併しそれにしても、この醜い取引が、公然街頭で行はれるといふことはどんなものであらう。同じ『必要な悪事』をするにしても、もう少し目立たぬ方法はないものか。それとも自由を尊ぶ英吉利人のことだ、そこには何か理屈があつてのことか。

筆者は、色々のことを次から次に考へて見たが、終に結論に到達することが出来なかつた。然るにその後出會つた或英國の紳士が、『英吉利には醜業を營む女は一人もゐない』と揚言した。そこで筆者は、『君はピカデリーの、あの醜い實在を否認するののか』とたゞみかけて見た。すると件の紳士は、『あれは總て外國の女だ。假にあの中に英吉利の女がゐるとするならば、それは既に英吉利人にして、英吉利人ではないのだ』と答へた。

何といふ強辯だ。『英吉利人であつても、醜業を營む以上、それは、もう英吉利人ではないのだ』といふ、その主張……随分勝手な主張だが、我がまゝな辯解だ。併し一旦醜業を營んだ者の、人格的存在を否認するところに、英吉利人の偉らさを發見することが出来て

うれしい様な感じもする。英吉利人は常に『紳士の國だ、自由の國だ』といふ信念に出發してゐる。丁度筆者が獨逸にゐた頃、伯林では犬に口輪がはめてあつた。これはその後、我が東京でも行はれたことであるが、狂犬病流行の結果である。

當時英吉利でも同様の議が起つた。併し英吉利人の多くは、『それは明かに動物虐待だ、犬の自由を束縛するものだ、何故政府は、犬に口輪をはめる前に、狂犬病の英國へ侵入して來るのを防止しないのだ』といつて、盛に反對した。この國民的輿論に鑑み、遂に英國では、この計畫は沙汰止みとなつた。『犬の自由』まで尊重するといふ英吉利人だ。況んや『人の自由』をやであらう。醜業を營むのは人の自由だ。併し一旦醜業を營む以上、その人格は認めないといふところに、自から紳士國たる英吉利の面影が躍如としてゐる。

我國に於ても、昨今公娼廢止の議論がやかましくなつて來た。筆者はこの問題を茲にこれこれ論議しようとは思はぬ。然し公娼の存廢如何に係らず、私娼が年々増加して行くことは争はれない事實だ。従つてその害毒が、日に月に廣く深くなりまさつて行くことも否むことが出来ない。西洋の物質文化は、享樂本能の文化だ。その物質文化を一も二もなく

取り入れて来たのが、我國の新文化であるといふならば、そこに本能的享樂の國民生活が生れ出づるのは當然のことだ。さうして我國各地の盛場が日一日と淫蕩氣分に飽和されて行きつゝあるのはこの傾向を如實に物語つてゐるではないか。

如何に英吉利最負の人でも、百鬼夜行に等しいピカデリーのあの夜景までも禮讚しようと思ふ人は一人もあるまい。而も英吉利に於ては左程の弊害がないといふならば、それは英吉利人に別個の修養があり、訓練があり、さうして歴史があり、沿革があるからである。併し、それでも筆者は、尙ほ英國に榮光あらしむべく、あの醜い實在を、何とかして無くしてやり度いものと考へる。

『日本は日本だ、日本人は日本人だ！』この自覺を抜きにした西洋の模倣は、實に恐るべき結果を日本及日本民族の將來に齎すものである。無論、筆者は我國の盛場に就ては多くを知らぬ。併し、我が日本の國から、ピカデリー式の盛場は絶対に排撃し度いものであると考へる。

義人宗吾を憶ふ

僕が札幌農學校の豫科を卒へ、本科に進み、初めて寄宿舎入りの出来たのは、今から三十年前の秋であつた。

云ふまでもなく、札幌農學校は明治九年の創立である。この學校の基礎を作るべく、遙々米國から来た、ウキリヤム・クラーク先生は、在職僅八ヶ月に過ぎなかつた。而もその間幾多の尊いエピソードと感化とを札幌に残して去つた。

彼は雄辯の必要を説き、寄宿舎に『開識社』なるものを設け、學生の辯論を奨勵した。然るにこの開識社が、この頃中絶してゐるのを遺憾に思つた僕等は入舎と共にこれを再興した。即ちクラーク先生の遺志を繼ぎ、大いに雄辯を練らうではないかといふのが、僕達の意氣込であつた。

斯て開識社は再興せられ、僕は亦壇上に立たねばならぬ運命に置かれた、元來無口で通つて來た僕のことである。黙々として語らず而も何等苦痛を感じないといふ僕が、大衆に呼びかくべく壇上に立つことの如何に重大であつたかは今更いふまでもない。その黙り屋の僕が開識社の壇上より大衆に呼びかけた處女演説は、實に『不平論』と題するものであつた。

不平！ 僕の若き血潮の中には所謂不平が充滿し切つてゐた。さうして僕は一時間餘に互り盛に不平を論じた。さうして最後に絶叫した、『男子の不平には斷じて私心あるを許さない、あの義人佐倉宗五郎こそ正に國民の言はんと欲して言ひ得ない大不満を、力強く天下に表明した眞の大不平家だ、そこには一身を犠牲に供し、以て萬民を救はんとする大精神の外には何物も發見することが出來ないではないか、諸君！ 明治の佐倉宗五郎たらんと欲するものは果して誰ぞ。』

僕が演説に一つの大きな信念を得たのは實にこの時であつた。それは兎に角、爾來、義人宗吾の靈を弔つて見たいと思ひながら、歲月は流れて早くも、三十年を經過してしまつた。然るに漸くその目的を達するの日が到來した。

九月二日は義人宗吾の命日である。この日を期して、彼の郷里の青年達が毎年集合を爲し演説を聴くのが慣例になつてゐる。即ち今日僕は彼等青年達の熱烈な要求により、行つて壇上の人となつた。

千葉縣公津村は宗吾の郷里である、彼の處刑を受けた場所である。而も今や義人宗吾の墓前には線香の煙絶ゆるの時なく、宗吾靈堂は廣大驚くべきものがある。僕はこの日先づ彼の墓を展し、更に靈堂を拜し、然る後講演會場に臨んだ。

農産物價格の慘落に伴ふ收入激減、而も農家の負擔に何等の輕減がない。僕は今日の行詰まつた農村の窮迫打開を熱望せる農村數百の青年を前に、二時間に互り之が救済の對策を論じた。純眞玉の如き農村の青年、熱烈火の如き彼等の態度、正に農村打開の大使命は彼等青年の双肩に在るを痛感した。而も、僕は壇上よりこの實狀を目撃しながら、論旨を進むると同時に、嘗て三十年前札幌に於て初めて壇上の人となり、盛に不平を論じ、義人宗吾を禮讃した當時を追懐し、感慨禁じ難きものがあつた。義人宗吾は、負擔の過重に惱

む領内萬民の苦惱を排除すべく、憤然として起ち、遂に四代將軍家綱に直訴を爲し、その目的は達したが彼れ及彼れの愛兒四名は處刑を受け、公津原頭朝の露と消えてしまった。『身を殺して仁を成し』た義人宗吾を生んだ公津村、そこに昭和の佐倉宗五郎一先づ出でずんばあるべからずだ。

農村今日の行詰りは、確に現内閣失政の結果である。而もこれが救済の應急對策は素より二、三にして足らぬ。吾人は大いにこれが對策に最善の努力を拂はねばならぬ。併しなから、我國農村の根本的振興策はもつとく深遠なるものがなくてはならぬ。それは、三千萬農民が『愛』に醒め、『感謝』の念に甦り、『義務』を重んじ、進んで『犠牲』を拂ふの大精神に出發することである。茲に於てか吾人は、先づ農村今日の行詰りを打開し、三千万農民を匡救すべく昭和の佐倉宗五郎出でよと絶叫せざるを得ない。

——昭和五・九・二——

心と心との問題

朝鮮の地方自治擴張の議が決し、更に臺灣に於ても同様の希望が濃厚になつて來たと報ぜられてゐる。故にこの際植民地統治に関する愚見の一端を述べて見るのも決して無益ではなからう。

植民地に於ける異民族統治の根本方針は『同化』にあらずして『分化』にありとは、自分が科學的研究の結果到達した最後の結論である。

元來同化政策は、その名は美なるもその目的とするところは、固有の民族精神を打破し去らんとするにあるから、政治上の實際手段としては、時に極端な強壓手段を伴ふことが少くない。従つてその結果は異民族の猛烈な反抗を惹起することがある。即ち歐羅巴各國に於ける異民族統治の實際は、一、二除外例はあるが、多くの場合、同化政策に伴ふ強壓

手段の悲惨なる事實を物語り、到る處『強壓は反抗を生む』の金言に權威あらしめ、且つ到る處貴重なる精力を、この悲しむべき『民族闘争』の爲めに消費せられつゝあることの實證である。故に異民族の反抗的運動は、強壓手段に正比例して増大し、自由協調に正比例して緩和されるものであることを忘れてはならぬ。

世界の植民史は常に『同化政策』の失敗を吾人に教へてゐる。従つて近年多くの學者も同化政策の至難なるを説いてゐる。併しそれよりも自分が愉快に感ずるのは、舊幕時代に於ける我國の學者が、同化政策の非を説いてゐることである。自分はその一例として馬場正道（一七八〇——一八〇五年）が『長夜餘論』を著し、その中に蝦夷開拓、土人撫育のことを論じてゐる一節を紹介して見る。

正道は即ち左の如く述べてゐる。

『され共惜むらくは、淺智の有司の手に落ちてなす事どもなれば、小利に趨りて大體にくらく、我意にまかせて事情にわたらず、彼等が質朴にして柔弱なるをあなどり、心のまゝのはたらきをなすも、まゝおゝし、まず彼が肉食の易きをとめて、穀食の難きをすゝめ、

彼皮毛の服の暖かなるを變じて、布帛の寒さをあたへんとし、彼が風俗を改めて俄に我邦の風にせんとするなど、とかく末葉にはしりて、治道の大體をしらざる也。夫移風易俗は古聖人も難しとする所なれば、淺智の凡夫のおよぶ所にあらず、まず暫くそのまゝにさし置いて、よく心服させん事こそあらまほしけれ、されども人の耳目を移すも一つの術なれば、いまだ人倫の道も知らざる者を、そのまゝ打すて置いて、禽獸のごとくあしらへといふにはあらず、それには次第のあるべきことなり。まず彼に示して、喜び従はんことよりして、とく施さば、自然と開けて人の道をも辨へる様になり、後には我風俗にもなさんは手をかへすよりもやすき事なり：：』

正道が百三十年前に論じたこの達見、自分は今日植民地統治の大任に當つてゐる多くの役人達に、靜かにこの一節を讀んで貰ひ度く考へる。さうしてその爲しつゝあることの是非を自ら判断して貰ひ度いものだと考へる。

植民地政策は内地人たる我等の心持や、氣分丈で割出すべきものでない。即ち朝鮮人や臺灣人の心持や氣分をよく察して然る後、初めてこれを決定すべきものである。我等の

民族精神を尊重すると同時に、彼等のそれに對しても尊敬を拂はねばならぬ。我等の有するものは總て善であり、彼等の有するものは悉く惡であるが如く考へてはならぬ。

我等は彼等の有する總てのものを基礎とし、その採るべきは採り、捨つべきは捨て、改むべきは改め、そこに新しい制度を布き、政治を行はねばならぬ。我等は『民族的には同じからずして互に和するの途』を有する。『和せんが爲めに先づ同せよ』といふが如きは、科學的にその出發點を誤つてゐる。我等は科學を無視してまでも、民族的に同一ならんことを計る必要もなければ、學問を無視してまで制度的に劃一を期する必要はない。

三絃が音樂として價値を有するのは、糸の一つ一つが特異の音色を有するからである。而もその異つた音色を、うまく調和するところに音樂としての眞善美があり、音樂家としての大手腕が存する。同化政策は恰も三筋の糸の總てを同じ音色に改めんと欲するのと同じである。これは糸の太さを改めない限りは不可能である。併し若しもそれが出來たとしたならば、三絃の音樂としての價値は全然消滅に歸するのである。

内地、朝鮮、臺灣、この三つの糸がそれ／＼文化上特異の音色を有するところに、日本

帝國と稱する大なる樂器の眞價が存するのである。而もこの樂器の音色をうまく調和して行くところに日本人の音樂家としての手腕を認め得るのである。我等日本民族が、この妙諦を會得するとき、初めて眞の植民政策が我國に生れ出で、ほんたうに『異民族統治の問題』が立派に解決せらるゝであらう。

我等の植民地に對する態度は『一視同仁』である。併しそれは決して『民族の同化』を意味するものでもなければ『制度の劃一』を意味するものでもない。事情を異にせる植民地に對し、その主體を成すべき原住民族の有する民族精神を尊重し、それを基調として、特異の制度を布き『分化』の實を擧げるところに一視同仁の妙味が存するのである。『同じからざる者は、先づこれを破壊して、同じき者に改造せよ』と稱し、或は又『同一ならざる者を容るゝに同一の容器を以てせんとする』が如きは、決して一視同仁の植民政治ではない。

我等は植民地の原住民族に臨むには『冷たき法律』を以てせずして、『温き人間味』を以てしなければならぬ。植民地統治策の基礎を成すものは法律學にあらずして、生物學であ

り、政治學にあらずして、心理學である。我等は斯くて初めて、異民族統治上、そこに一種の新哲學を發見し得るであらう。即ち植民地統治の根本は『人と人との問題であり、心と心との問題である。』この新哲理を理解するに於て初めて我等の植民政策は完全なるを得るに至るであらう。

——昭和五・九——

政治の話

最近議會政治に對する一般國民の信頼が著しく薄らいで來たことは、世界共通の新現象である。従つて議會否認の獨裁政治も夙に出現し、而も良好なる政治的成績を擧げてゐるものも決して少くない。

筆者は必ずしも獨裁政治の謳歌者ではない、又議會政治不信任論者でもない。否な筆者は飽までも我國の議會政治を健實に發達せしめ、これによつて國家の興隆を永遠に期せんとする熱烈な希望を抱きながら、自ら平靜な官海に舟を乗り捨て、政界に投じて來た一人である。併し如何に考へて見ても我國議會政治の現状は實に憂ふべきことのみである。故に今にしてこれが革新に精進するなくんば、その前途は悲しむべき或者を持ち來すのではないかを恐れる。

無論我國の新文化は、西洋模倣の文化である。諸般の文物制度悉くこれを西洋に採つて來たのが過去六十年間の日本の歴史である。元來文化なるものは、これを完成した民族の有する『民族精神』の外的表現にすぎない。故に或民族の有する文化はそのままこれを他の民族に移入することは出来ない。即ち法律規則の力によつてその形式はこれを移入することが出来ても、その精神はこれを移し植ゆることが困難である。そこに模倣文化の大なる缺陷があり、大なる悩みが存在するのだ。而して我國の議會政治の如き、亦たこの一般原則の境を脱し得ないはいふまでもない。

日本は法治國だ。故に總てが法律規則の攝理を受くるのは當然である。併し現代日本は餘りに法律規則に支配せらるゝことが多すぎはしないか。法律規則さへ出来れば、それで總てのものが完成したかの如く考へてゐるのが、今日の日本國民ではなからうか。そこに精神のぬけた空虚な形式ばかりの諸制度が生れ、無益な手數と時間とを費し、國務更に擧らず政治は沈滞し産業は不振を來し、國民精神は頹廢するに至つたのである。今日の議會政治に不満ありとすれば、これ等幾多の缺陷が、そこに堆積せられた必然の結果と見なければならぬ。

『名』よりも『實』吾人は常に政治の中心をこゝに置かねばならぬ。筆者が獨逸に留學してゐたのは獨逸の全盛時代であり、帝政の黄金時代であつた。當時カイザーの勢はすばらしいものであつた。專制政治の權化の如く考へられたのがその頃の獨逸皇帝であつた。成程彼の内閣は政黨に基礎を置かない超然内閣であつた。併しそこに却つて政治の眞面目さがあつた。與黨なき政府は、善政を行ふにあらざれば、議會の協賛を得る譯に行かぬ。従つてその政治が、常に全國民の幸福増進を目標としたことはいふまでもない。

當時社會政策の最も完全に行はれてゐたのは獨逸であつた。従つて失業者なく、乞食なくストライキも絶無であつた。貧民窟に行つて見てもロンドン邊のそれとは比較にならぬ程立派であつた。又民間事業家の社會的施設に就て見ても同様であつた。クルツプの工場に行き労働者のホームの整頓を見た者は、恐らく何人といへども労働者の幸福を思はないものはなかつたらう。

カイザーは『思想に對するには思想を以てしなくてはならぬ』と信じた一人であつた。

『帝政であつても社會主義者の主張する總ての施設は立派に出来るではないか』と強調し、且つこの理想を政治の上に實現すべく努力したのが彼であつた。そこに『形式』よりも『精神』を尊ぶ彼れの歩み方が窺はれる。又『名』よりも『實』に重きを置いた彼の政治振がよく現はれてゐる。

筆者は決してカイザーの政治を禮讚するものではない。併し事實は事實としてこれを考へてをることは差支へがない。筆者は在獨二年、靜かに當時の歐羅巴各國の政治とその社會相とを研究し、政治は決して『名』に偏すべきものでなく、常に『實』に則すべきものであることを痛感したのであつた。

更に筆者は臺灣統治に對し十有八年間の體驗を有する一人である。その體驗から考へても政治は形式に禍せられ、精神に幸せらるべきものなることを痛感してゐる。最近ムツツリーニの獨裁政治が色々の非難はありとするも着々として伊太利再建の大業を進め、全伊太利國民の幸福を増進しつゝあるの一點に就ては、何人も異論はなからうと考へる。

詩人ポーブは、併つて『政體論は愚人の談議に任すがよい。善く治まりさへすれば、その政治は優良なりである。人民が靜穩であることは必ずしも王政であると民政であるに由來するものにあらずして、善政なると秕政なるとに従つて定まるものである』と論じてゐる。秕政を行ふ議會政治よりは、善政を行ふ專制政治の方が寧ろ國家國民にとつては幸福なりといはねばならぬ。：：筆者は飽迄議會政治を健實に發達せしめたいと考へる。さうだ『善政を行ふ議會政治、政黨政治』を希望して息まぬものである。若し我國の議會政治の現状がこの理想を裏切つてゐる事實があるとすれば、吾人は、飽迄これを是正しなくてはならぬ。

『名』よりも『實』、そこに政黨政治の眞使命を發見し、議會政治の目標を確立しなければならぬ。而してこの目的を達せんが爲めには、先づ黨人自ら反省し、自ら努力するところがなくてはならぬ。

雪降る日の小鳥

明治四十三年の二月半ば、珍らしく伯林に雪が降つた。朝から降り初めた雪が午後になつても降り息まぬ。煤煙に汚れた伯林の街も銀世界、美しい景色である。

何時もの通り下宿のお婆さんが、午後の雑談を試みるべく僕の部屋にやつて来た。「お婆さん、日本では雪見酒といつて酒を飲みながら雪景色を眺めるのが普通だ。併し獨逸人には、そんな風流心は薬にたくもないだらう」かう云つてお國自慢をしたのが僕であつた。聽て黙つて僕の部屋を出て行つたお婆さんが、今度は、皿に何か一杯入れた奴を持つて来て、僕の部屋のバルコンにそれを置いた。僕はそれを不思議に思つた。さうして質ねて見た。

「お婆さん、今のは何です。」

私の側の安樂椅子に腰をおろしたお婆さんは、靜かにいつた。

「お前の祖國日本では、雪が降れば、雪見酒を飲みながら雪景色を眺める風流心があるさうだ、それも結構なことだ。また、我が獨逸では、雪が降れば、雪除けの仕事が出来、労働者が職にあり付き勞銀を得て助かる、これも喜ぶべきことだ。併しそこには、また哀れな者がある。それは小鳥達だ。今朝から一日中飛び廻つて餌をあさつてゐるが、この雪では餌一つだに見出し得ないのだ。今バルコンに持つて行つたのは、その哀れな小鳥達にやる餌だ。空腹に惱み切つたものゝ爲めに、食を與へるのは人間當然の務めではないか。」

お婆さんは、かういひながら、僕の顔を靜かに眺めた。さうして彼の女の眼は慈愛に充ちた、何とも名狀の出来ない様な一種の光を帯びてゐた。僕は今更ながら、雪見酒の自慢話が恥しくなつた。さうして、この尊いお婆さんの心の光にすっかり打たれてしまつた。さうして和蘭の諺に、

『神は鳥に餌を與へ給ふ、併し鳥はこれを得る爲めに飛ばねばならぬ。』
といふのゝあるのを思ひ出さずにゐられなかつた。

神の目から見れば、總ての生物は平等だ。雀が軒に巢を作るのも、英雄の死ぬのも別に變りはない。即ち神は總ての者に平等に食を與へるのだ。併しそれを得んが爲めに鳥は飛ばねばならぬ、人間は働かねばならぬ。これが自然だ。

併し、いくら飛んでも飛んでも餌一つだに見出し得ないのが雪降る日の小鳥達だ。さうなると小鳥から見れば雪を降らすものは悪魔だ。純白汚れなき雪にもこのいたづらがある。悪魔に食を奪はれた哀な小鳥達を救ふものは、この場合、神の如き心を持つてゐる人間の務めでなければならぬ。その神の務めを全うしたのが、お婆さんであることに氣が付いたとき、僕はこの親切な、神の如く佛の如き慈悲心を持つてゐる、お婆さんに心から感謝せざるを得なかつた。

顧みれば、もう二十餘年前のことであるが、僕は今だにあの時の光景や氣分を忘れることが出来ない。さうして我國の現状を顧みて、僕は特に感慨なきを得ない。

即ち雪降る日の小鳥達と同じ實情に置かれてゐるのが、今日の日本國民だ。最近の深刻な不景氣、それは悪魔の降らす雪に等しいのだ。更に失業者の續出、いくら働かうと思つても職がない、その有様はいくら飛んでも餌一つだに見出し得ない雪降る日の小鳥達と同じ境遇だ。

雪を降らす悪魔、その雪の爲めに悩み切つてゐる哀れな小鳥達を神に代つて救ふべき任務は一體誰がやるのだ。

我國現下の殺人的不景氣……失業の洪水……物價の慘落……農村の窮迫……これ悉く悪魔にひきずられた政治當然の結果だ。我國に雪を降らした政治家の責任をこゝに問ふものではない。併し雪中の小鳥達は飛んでもくゝ食なく、悩みに悩んでゐる。この悩める小鳥達に食を與ふるお婆さんはないものだらうか。

『飛ぶ鳥に餌を與へ、働く人に職を與へよ。』

これのみが、現下の行詰つた國狀打開の目標でなくてはならぬ。これが政治の眼目でなくてはならぬ。併しこの大業は雪を降らした悪魔には出来ない。これは神の心を以て心とする者にして初めて達成せらるべきものであらう。僕は救済主の出現を望んで息まぬ。

一點の曇

昭和三年六月十二日海軍大臣は貴衆兩院議員約百五十名を最新航空母艦『赤城』に招待して、飛行作業を觀覽せしめた。筆者もまた招待を受け久しぶりに氣持のよい見學をしたことを今だに忘れることが出来ない。

私達は横須賀から航空戦隊旗艦『赤城』に便乗、航空母艦『鳳翔』及驅逐艦二隻を隨へ館山沖に出動、午前十一時半から飛行作業は開始せられた。

先づ『赤城』の攻撃機六臺、戦闘機六臺は一齊に離艦し、次で攻撃機は三機宛の二編隊として赤城に對し魚雷攻撃と爆彈投下を行ひ、赤城はこれに對し、戦闘機を以て逆撃を爲し、茲に空中戦を開始し、且高射砲を以て防空射撃を行つた。斯くて豫定の作業を無事終了した。各機は順次着艦作業を行ひ、その日の作業全部を無事終了した。

赤城の見學により、帝國海軍の偉大なる發達、特に飛行作業の遺憾なき進歩を知り、非常な力強さを感じた筆者は、更に海軍機關學校地先の海岸に保存せられてゐる名譽の軍艦『三笠』を參觀し、日露戦役の當時を追憶して感慨禁じ難きものがあつた。

戦艦一隻だに有しない我日本は、巡洋艦『松島』を旗艦として支那と戦つた。而も日清の戦役に我國が大捷を得たのは、機械の力にあらずして實に『精神』の力であつた。當時戦勝の結果戦利品として回航して來た鋼鐵戦艦『鎮遠』を横須賀に參觀しその偉大なるに驚いたのは、筆者が中學二年の夏であつた。その後十年にして日露の戦役は始まつた。當時の帝國海軍は旗艦『三笠』を始めとし幾多の戦艦を有し、遂に露國の全艦隊を撃滅し、世界驚異の中心となつた。故にこれを十年前の日清戦争當時に比すれば、その進歩の著大なる實に隔世の感なきを得ない。併しそれにしても機械の力に於ては必ずしも露國の敵ではなかつた。故にあの大勝利の裡面に動いた大きな原動力は依然として『國民精神』であつたことを忘れてはならぬ。

然るにこの十年間の進歩に驚いたのも夢の間、今や陸奥、長門を初め、無數の大戦艦を

保有するのみならず、特に大巡洋艦その他の發達實に目醒しきものがある。即ち今二萬七千噸の最新航空母艦『赤城』を觀た目を三笠に轉すれば、嘗て世界の驚異であつたこの大戦艦もまるでオモチャの軍艦であるかの感なきを得ない。併し筆者は三笠の司令塔に登り日本海々戦に當り東郷司令長官が親しく三軍を指揮せられたといふその位置に立ち、自ら東郷司令長官になつた様な氣持で、當時の實情を追想し、『日本海々戦の大捷は矢張り、國民精神の力であつたのだ』といふ感じを一層深くせざるを得なかつた。

現今我國に於て科學の進歩に最善の努力を爲し、學術の利用に萬遺憾なきを期してゐるのは帝國海軍であることに何人も異論はなからう。そこに帝國海軍の大なる誇がある。併し科學の上に立つて常にこれを支配し、その偉力を充分に發揮せしむるものは『精神』である。日清日露兩戰役に、寧ろ劣弱な海軍力を擁しながら、あの大勝を收め得たのは、決して機械の力ではなく、實に『精神』の力であつた。而して將來といへどもこの事實に何等變りのあらう筈がない。即ち筆者は親しく『赤城』を見學し、飛行作業に従事する將兵が常に身命を投げ出して護國の重任に當らんとしてゐるその『眞劍』さを見、その雄々し

き『大精神の發露』を目撃し、心からの喜悅と感謝とを禁じ得なかつた。……『生命を投げ出しての努力』そこに眞の國民精神は發見せらるゝではないか。故にこの貴い國民精神の鏡に一點の曇りでも生ずることがあつたならば、それこそ國家の一大事だ。

嘗て佛蘭西のボルティヤーは『英國は海を支配し、佛蘭西は陸を支配し、獨逸は空を支配す』と稱した。これは英の海軍、佛の陸軍を讚美し、當時國力微弱にして、何等の勢力なき獨逸を冷笑したボルティヤー一流の皮肉に過ぎなかつた。併し科學の進歩した今日眞に世界の覇者たらしとするものは『海も、陸も、空も同時に支配する實力』がなければならぬ。筆者は『赤城』の艦長室に『制大海』といふ東郷元帥の額がかゝつてゐるのを見て、無意識にボルティヤーのこの言を思ひ出した。さうして今日は『大海を制し大陸を制し、更に大空を制する』の意氣を必要とする時代だ。この旺盛な意氣あるに於て、初めて東洋の平和は維持せられ、更に全世界を打て一彈とした、平和の大殿堂が我等の地上に建立せらるゝに至るであらうと考へた。

爾來歲月流れて二年有餘、今や海軍々縮に関するロンドン條約は樞府に於て審議中に屬

し、一時形勢險惡なりと傳へられたに係らず、去る十七日の精査委員會に於て滿場一致可決せられた。故に本條約批准の日も遠くはあるまい。

筆者は最初から斯くあるべしと豫期してゐたからこの成行を別に不思議とは思はない。併し筆者がこの條約の運命が可決に在りと豫想してゐたのは「それが可決さるべきものだ」と考へたからではない。筆者は軍國主義者ではないが、この條約に非常な不満を有する國民の一人だ。故に筆者のこの豫想の基調となるべき事實は他にある。即ちそれは『國民精神の頽廢』そのものでなくて何であらう。

我國が日清、日露の兩戰役に勝ち得た主因は前述の如く機械の力ではなく、實に精神力であつた。然るに今やその國民精神に一種の曇を生じたことがロンドン條約の全體を通じて發見せらるゝに至つては、萬事休すではないか。

西郷南洲翁は嘗つて外交を論じ、『正道を踏み、國を以て斃るゝの精神無くば外國交際は全かる可からず。彼の強大に畏縮し、圓滑を主として、曲げて彼の意に順從する時は輕侮を招きて、好親却て破れ、終に彼の制を受くるに至らん』といつてゐる。今回のロンドン

條約は即ちそれではないか。

現内閣及全權諸公に『正道を踏み、國を以て斃るゝの精神』が足りない。そこに夙くもロンドン條約の全からざる主因が宿つてゐる。更に英米の強大に畏縮し、國際協調の美名に隠れ、圓滑を主とし徒らに彼の意に順從したのが、ロンドン條約である。斯くて彼の輕侮を受くるに至るは當然であり、爲めに好親却つて破れ、遂に彼の制を受くるに至らんことを恐れる。而もこの條約が今や正に樞密院に於て可決されんとしてゐる。筆者は、そこにも一點の曇りを發見せざるを得ない。

ロンドン條約批准のあかつきに於て、我帝國海軍の對米關係は明かに不安である。即ち本條約によりアメリカは、『西太平洋の攻撃作戰』に充分なる兵力量を獲得することが出來、我日本は『西太平洋の防禦作戰』に絶對必要な兵力量をも放棄せざるを得ないこととなる。アメリカは東洋に對する侵略戰の可能性をより大ならしむるに反し、我日本は守備作戰に必要な最低兵力までも泥土に委ねたのが本條約の真相である。

フランク・サイモンズはロンドン條約を評して『英國は二世紀の間世界の七大洋を支配

して来たが、今やそれを放棄してしまつた。さうしてアメリカは、世界覇權に向つてまた一ステップを進めた」といつてゐる。英國のことは兎も角、アメリカがこの條約により、世界覇權の掌握に一步を進めたことは争ふべからざる事實である。而してアメリカの東洋進出は火を賭るよりも瞭かである。

八吋巡洋艦の對米劣勢と潜水艦の大減少とにより我國は機械力に於て、確かに劣敗の地位に置かれることになつた。勿論國民の元氣旺盛なるに於ては機械力の不備は精神の力を以て或程度まで補ひ得るものである。否な精神が常に機械を支配するとき、初めてその國防は安全なるを得るのだ。然るに今やその大切な國民精神に曇りを生じてゐるとしたならば、何を以てか、この劣弱な機械力の缺陷を補填することが出来ようぞ。

ロンドン條約の最大目的の一は、世界平和の維持である。而してこの目的達成の爲め、我日本は特に東洋の平和維持の重任に當らねばならぬ。従つて我國の必要とする兵力量の最低限度は、東洋の平和を維持するに足るべき程度のものでなければならぬ。即ち世界に眞の平和を招來すべく、又我日本の國家國民の現在及將來子孫の爲め、その正しき生存權を確保すべく必要な最少限度の要求を堂々と強調力説するのが何で悪いのだ。而もこの正しき主張を貫徹し得なかつたのは、現代日本人が享樂主義物質文化の餘弊を受け『正道を蹈み、國を以て斃るゝ』の大精神がないからである。斯くてロンドン條約は永久に救ふことの出来ない一大暗影を國家國民の將來に投じ、更に子孫の爲め一大禍根を残すものだ。國民に『生命を投げ出しての努力』なきとき、國家民族の辿るべき途は、たゞ一つ『衰滅』あるのみだ。

血の燃える病氣

自分が札幌農學校の豫修科に入學したのは明治三十二年の九月であつた。爾來本科卒業まで在學滿六年。クラーク先生が札幌を去るに際し、明治十年、島松驛にて馬上豊かに残して行つたといふ、あの名句“Boys, be ambitious!”に、云ふべからざるインスピレーションを感じ、更にあの卓越した校風と、あの偉大なる自然とに限りなき感化を受けた『札幌時代』を今から顧みれば、まるで夢の様だ。

札幌に學生々活を營んだ者の總てが必ず經驗するところは、或時代非常なメランコリーに陥ることである。殊に半歳雪に籠らねばならぬ冬の日に於て、青年の血は燃えて、やる瀬なき幾日かを陰鬱に送らねばならぬことの悩みは、また格別である。

丁度豫修科二年の冬であつた。自分はこの陰鬱の氣に押さへ付けられて、もう我慢が出来なくなつてしまつた。自分が決然起つて級友達に叫びかけたのは實にその時であつた。

『諸君！我等の胸には、若い血潮が燃え切つてゐるではないか。而も半歳の間雪に閉ぢ込められ、毎日同じ様な講義をノートして行く我等の學生々活も、みじめではないか。我等は將來日本の國家を双肩に荷つて起つべき大使命を有するのだ。故に我等は時に大に浩然の氣を養はねばならぬ。我等は一日の休業を學校に要求しよう。さうして雪中網を張り兎を追ふの壯舉を敢てしようではないか！』

自分の動議は直ちに成立した。さうして三宅級長（現北大教授三宅康次博士）鈴木副級長（現北大水産科教授鈴木寧君）の兩名を全權大使に任命して、學校に交渉せしめたが、談判は遂に決裂に終つた。そこで我等は教頭宮部金吾博士に教室迄御出向あらんことを要求した。子弟の關係親子の如き札幌のことであるから、宮部先生は、直ちにあの濇容を我等の教室に現した。さうして臨時休業の不可能を熱心に説いた。我等は代るく『兎狩』の必要を力説したが、宮部先生頑として應じなかつた。萬策盡きた自分は、最後に叫んだ。『諸君！我等の總ては病氣にかゝつてゐるんだ。血の燃える病氣だ。この病氣は、身體

を雪にさらせば直に癒る。明日一同缺席届を出して療治に出かけよう。』

一同それがよいと應じた。併し宮部先生は『それはおだやかでない、それでは、原先生（現駒場農大教授原十太博士）に交渉して、動物採集の名義にして貰ひ給へ、それなら學校も同意する』といった。成程名案だ、兎狩は確に動物採集だ、これなら原先生も、きつと文句無しに同意して呉れるだらう。

多くの期待を持ちながら、早速原先生を訪ねて談判して見た。併し豫想は全然裏切られてしまった。『勉強は勉強、遊びは遊び、そんな計畫には賛成は出来ない。遊び度けりや堂と兎狩をやつて浩然の氣を養へばよいではないか』といつて、たうとう原先生は、首をたてに振らなかつた。

間もなく、『植物採集』の名義の下に、我等の目的を達するの日が來た。當日宮部先生は三十分間ばかり、植物採集に関する講義を試みた。さうして級友數十名は山田先生（現鳥取高等農業學校長山田玄太郎博士）に引率せられて、校門を出で、琴似平野を目當てに行進した。但し一行中、植物採集罐をぶら下げてゐるのは、山田先生たった一人。

その夜は、琴似小學校の裁縫室を本陣として一夜を明かした。翌日は早朝より網を張つて兎を追つて見たが、つい兎は影だに見せなかつた。中には陣地が悪いのだといふ意見も出たが『何、植物採集だ、動物が出てたまるものか』と、すましてゐる人もあつた。……成程兎は植物ではない。

獲物は無かつた。併し我等の病氣はすっかり癒つてしまつた。斯くて學生の元氣は天を衝くの勢を示した。その翌日からの教室は、いつも明るい空氣が充滿してゐた。室外の吹雪も、室内に於ける若き學生達の旺んな意氣を奪ふことは出来なかつた。

札幌農學校は、毎年秋期一回、全校を擧げて遠足會を催し、農園の豚を屠つて無邪氣な一日を送ることになつてゐた。ところが、自分達が斷行したこの壯舉に端を開き、爾來毎年一回雪中行軍を行ひ、大に士氣を養ふことになつた。雪に鍛はれた青年の意氣、聽てはそれが國國民人を背負つて起つべき、何者かを生み出すことになるであらう。

稻空しく稔る

村人の顔にやつれの色みせて

空しく稻の稔る秋かも

本朝の都下各新聞は、昨二十八日開催された帝國農會總會に於ける農林大臣の告辭及諮問案に對し、可なりの不滿が開陳せられたことを報じてゐる。素よりこれは新聞の單なる報道に過ぎないから、十分にその真相を知ることが出来ないが、如何にもありさうな事柄である。

繭價の大慘落はいはずもがな、農産林産總てのものゝ大暴落、それに米價が一躍十圓も低落して十四、五圓を稱せらるゝ今日、農家の窮迫は想像に難くない。恐らく本年農家の減收は十億圓を突破し、前年に比し半減の慘狀を實現するであらう。

然るに一面五十億圓の大負債を有するに係らず、その租税公課に就ては、何等の輕減を見ない。斯くても尙ほ且つ農家經濟に遣り繰りの餘地ありと考へるものが一人でもあり得るだらうか。この秋に當り農相が『農村不況の根本的解決は農民の自主的活動に俟つ、依つて農家の採るべき方策如何』といふ諮問を發し、自力打開の必要を説くが如きは、一寸常識的に考へても、當を得たものとはいへない。

米が豊作だといつて見たところが、その増收は平年作の一割餘に過ぎない。然るに米價は四割餘の大暴落だ。この事實だから考へても、今日の行詰つた農民が、自らこの大問題を解決するの力ありとは考へられない。即ち今日は農村に取つては、非常の場合だ。非常の場合に際し國家はもう少し眞剣に農村、農家の現狀を考へ、更に國家の將來を慮かるところがなくてはならぬ筈だ。無論私達は、農村のことは農民自らこれが解決の大任に當るべきことを主張する。併しそれは時と場合だ。今日の米價對策については、先づ以て國家自ら最善の努力を爲し、然る後に農民に對して自力の發奮を要求すべきではなからうか。然らば國家は目下の米價問題に就て自ら何事を爲したであらうか。

米穀の輸入關稅の引上げ、及輸入制限期間の延長、及政府持米の海外輸出……政府が、應急對策として目下計畫中の事項は先づこんなものではないか。併しこれは仕なけりやならぬことを、たゞしたといふ丈けのことであつて、その効果は餘りに期待は出來ない。それよりも農民の要望するところは、本年の過剩米をどうして呉れるのだ、この米價慘落をどう解決して呉れるのだといふ點ではないか。本年の新米穀年度は既に初まつてゐる。東北地方の新米は夙くも市場に投げ賣りせられてゐるものがあるではないか。一體政府の新米買上げはどうするのだ。ぐづぐづしてゐる内には、さらぬだに窮乏の農村は新米の投賣以外に自力的對策なきに至り、新米の市場殺到は防止するに由なく、米價は慘落に亞ぐに慘落を以てし、遂に停止するところを知らぬに至るであらう。……それでも尙ほ農村に理解ある政治といへようか。これでも農民に同情ある政治といふことが出来るだらうか。

これにつけても私は思ひ起すことがある。それは、もう二十年も前のことだ。私が獨逸留學の當時である。或年、歐羅巴各國を通じて、牛肉の暴騰したことがあつた。斯くて各國到るところに、牛肉關稅撤廢のデモンストレーションが行はれた。丁度その時、獨逸の

農政會は、伯林に大會を開き、カイザーは總理大臣農林大臣その他關係諸官を率ゐてこの大會に親臨し、自ら一場の農事講話を試みた。さうして食料自給の必要を説き獨逸が牛肉自産自給の可能性を有することを高調した。カイザーの講話に次て、總理大臣ベトーマン・ホルウエツヒまたカイザーと同趣旨の大演説を試み、盛に農業保護の必要を説き、食糧の自産自給が國家國民の安泰を期する上に於て、必要缺くべからざる所以を述べ、以て關稅撤廢の不可を力説し、政府の遂行しつゝある國策の誤りなきを高調した。

翌朝の諸新聞は何れも總理大臣の演説を批判してゐたが、就中猶太人系の機關新聞たる、ベルリーナー・ターゲブラツツは『農業宰相』なる題目の下に論説を書き、總理大臣の演説を非難してゐた。私はこの論説を読んで『獨逸と云ふ國は幸福な國であり、獨逸國民はまことに仕合せな國民だ』と考へた。さうして更に『我日本に於ても、たつた一人でよいから、よく農業を理解し、眞に農村、農民の味方となつて、農村本位の大政治を斷行して呉れる様な農業宰相が欲しいものだなあ』と考へた。

爾來歲月を経ること正に二十年、未だ我國に一人の『農業宰相』だにいでざることを悲

しみつゝある折から、今朝の新聞を読んで思はずも長歎息を禁じ得なかつた。

國家國民の永久的幸福を目標として農業保護の大國策を樹立し、これが遂行の半途に於て會々肉類騰貴の結果關稅撤廢の民衆的運動起りたるも毅然として動かす、その國策の遂行に忠實なりし爲め、反對新聞より『農業宰相』と惡罵せられるに至つたが如き、總理大臣を有したればこそ、獨逸はその國の農業農村を完全に維持し、あの世界の大戰に際し、敵に周圍を封鎖せられ糧道を絶たれたに係らず、尙ほ且つ四年半の長きに互つて祖國を維持することが出來たのだ。

それに引きかへ我國の現状はどうだ。今日の深刻な不景氣、殺人的な失業者の續出、更に物價の暴落、それより來る國民生活の一大脅威……これ悉く、世界的不景氣の結果だ。世界を通じての生産過剰なもの、日本だけでどうすることも出來ないではないかと、盛にその無爲無策を暴露しつゝあるのが、我國の内閣諸公だ。

一體現内閣は、この行き詰つた農村、否な自分達が行き詰らしたこの農村を、どうしようといふのだらう。殊に現下農村死活の重大問題たる米價の應急對策をどうするつもりだ。

農林大臣は、農民自身の對策如何をたづねる前に、先づ農相自身どうすればよいのか、それを篤と考へらるべきだ。

『豐年地獄』に落し入れられた三千萬農民を、速に救濟するのが、現下の政治的大使命ではないか。稻は豊に稔つて却つて農民の顔に憂ひの色がたゞよつてゐる。これをしも聖代の不祥事といはずして何といはふぞ。

ドロテア

『ヘルマンとドロテア』はゲーテ傑作の一つである。併し話の筋は極めて簡單だ。即ち佛蘭西の動亂を避けて、獨佛の國境を逃げて來る獨逸の少女を、その土地の金満家の息子が見染めて女中に雇入れ、遂には兩親を説得して、自分の妻にしたといふまでのことである。

この物語の主人公たるヘルマンは、勉勵、誠實、敬愛といつた様な精神に飽滿し切つた眞の獨逸の青年であつた。更にこれに對する少女ドロテアは貞節、確信、博愛、奮闘の諸徳を具へ、艱難に堪へ、理想に邁進して息むことなき獨逸の少女であつた。而してこの青年男女を對照とした叙事詩が、廣く獨逸國民に愛誦され愛讀される所以のものは、この短かき一篇の中に獨逸精神が心行くばかり溢れ出てゐるからである。

エロだ、グロだと矢鱈に尖端的な言葉を用ゐるのが、現代日本に於ける青年男女の誇りだといふを聞くに至つては國家の將來が案じられてならぬ。筆者は我國現下の憂ふべき世相を根本的に打開すべく、ヘルマンの如く眞に男らしい男、又ドロテアの如く眞に女らしい女の出現を、先づ以て要望せざるを得ない。併し筆者がこゝに書かんとするドロテアはそれとは全く別人のドロテアである。

筆者が獨逸二ケ年間の留學を終へ、歸途英京倫敦に滯留すること二ケ月の後、サザンプトン港より汽船プレジデント・リンコルン號に投じ、ニューヨークに向け出發したのは、明治四十四年十二月の三日であつた。

冬の大西洋は、連日に互り可なりの荒れ續きであつた。而もこの難航の間に、亞米利加生れの一少女ドロテアを見出し得たことは、今だに忘るゝことの出来ない思出の一つである。

ドロテアは亞米利加人を父とし、獨逸人を母とする當年取つて十五歳の少女であつた。即ち母なる人はブレスラウの生れで、夙に亞米利加に移住し米人ホイット氏に嫁し、現在テキサス州にて、七千エーカーの農場を經營してゐるといふのであつた。さうして娘を連れ

て獨逸に趣き、初対面のヂイさんバアさんを喜ばしての歸り途だと話してゐた。

そのホイト夫人が、筆者が獨逸留學の歸途に在るを知るや我子の如く親切にして呉れた。さうして夫人はいつた『うちの娘は満十四歳になつたばかりだ、お前がサザンブトンから乗船した、あの日が娘の誕生日であつた。名はドロテアといふのだ。あのゲーテの名作ヘルマンとドロテアにヒントを得て付けた名前だ。お前も日本の紳士ではないか、紳士の獨り散歩は間が抜けてゐる。うちの娘を話相手に貸してあげる。何の遠慮もいらぬこと、今日からは、二人で一しよに散歩するがよい』といった様な風に、すつかり筆者を信任して呉れた。筆者がヘルマンになつた氣持で少女ドロテアとよく甲板を散歩する様になつたのはそれからのことであつた。何しろ十五歳の小娘、柄は大きい云ふことは色氣なしの無邪氣な話ばかり、丸で天使の様な純な心持のする少女であつた。

汽船プレジデント・リンコルン號が無事ニューヨークに到着したのは十二月の十四日であつた。さうしてホイト夫人は頻りにニューヨークに於て同宿することをすゝめた。彼の女はいつた『私達はホテル・アスターに行くが、お前もいつしよに行け、あのホテルは第一流だからお前が泊つても決して恥辱になる様なことはない。』ほんとうのことをいふと、旅費をすつかり費ひ果し、残り少なくなつてゐる筆者は、可成儉約をして、ホテルも二流三流で我慢しようと考へてゐた最中であつた。故にホテル・アスターなら紳士たるお前の態面をけがす様なことはないから一諸に行かうと、すゝめられて實は非常に有難迷惑を感じた。併しそこが日本人の見え坊な所以であらう、たう／＼これを斷る丈けの勇氣もなく、母娘のすゝめるがまゝに、ホテル・アスターに投宿することになつた。

その晩のことであつた。船中から約束してゐた、ヒポドロン見物を實行することになりホイト夫人が電話で座席の交渉をした。然るに六弗の座席しか空いてゐないとの返事であつた。筆者は『六弗でも、七弗でも、かまはんではないか、行くことにしよう』といった。然るに彼の女は『お前とわたし二人丈けなら、それでもよい。併しうちの娘に六弗の座席は高か過ぎる。折角だが、ヒポドロン見物は見合せにしよう』といった。斯くて筆者も、少女も非常に樂しみにしてゐたヒポドロン見物はふいになつてしまつた。

亞米利加から見れば、ちつぽけなものであるかも知れない。併しそれでも七千エーカー

の農場主といへば相當の地主である。母娘二人の座席代を拂つても十二弗に過ぎない。然るに十五歳の小娘に六弗の座席は贅澤過ぎて、子供の教育に宜しくないと考へ、折角の見物を惜し氣もなく中止するところに、我等の學ばなければならぬ點がある。

日本人は常に親の地位を標準にして子供を考へる。併しそれは大きな誤りだ。親は親、子は子、親が汽車汽船の一等に乗るべき地位にあるからといつて、子供迄が一等に乗る必要はない筈だ。親は一等でも、子供は三等で行くといふことでなければ、ほんたうに獨立的な健實な青年は出來上らない。筆者はホイト夫人のこの立派な態度にすつかり敬服せざるを得なかつた。現に筆者は自分の子供達は三等汽車以外には乗車を許さぬことにしてゐる。故に子供を連れて郷里に歸る場合の如き、筆者自らも一等のバスを持ちながら三等客になつて旅行することを原則としてゐる。而も斯くすることによつて、非常な教訓を得ることが出来るから愉快だ。『身分相應』といふことは、日本でもよく説かれてゐる。而も實行の出來ない場合が多い。そこに行くといふ人は徹底して身分相應の原則を實行する。筆者はこの事實をホイト夫人に發見して非常にうれしく感じたことを今に忘れることが出來ない。

その翌日の午後であつた。ホイト夫人は所用の爲め外出するとドロテアを筆者に預けて置いた。豫め夫人の同意を得てあつたから、二人でお茶を飲みながら四方山の話をつづけた。さうして最後に筆者はいつた。

『今夜はいよ／＼お別れだ。今夜お別れしたら、また何時會ひ得ることだらう。亞米利加と日本との間には、太平洋の海が横はつてゐる。併しこの廣い／＼太平洋も我等の友情をさへぎるだけの力は持たない筈だ。櫻咲く日本の國は自然も美しいが、人情は更に／＼美しいのだ。自分は他日貴女が我等の祖國日本を訪問せらるゝ日のあることを希望する。』

ドロテアはいつた『きつと日本に行きます、比律賓には私のお友達も行つてゐることだし、日本から比律賓へと、東洋の風物を見に行き度いと思ひます。併しそれは私が結婚した後のことです。ホネームーンに私はきつと日本に行きます。』：：満十四になつたばかりの少女、柄は大きい、ほんたうに無邪氣な少女である。その少女の口から『新婚旅行はきつと日本にします』といふのを聽いて筆者は、矢張りこの少女は亞米利加の娘であつた

ことに気が付いた。日本少女のいひ得ないことを平氣でいふところに彼我の相異を發見するのだ。而もその云ふところに何等不自然の點がなかつた。處變れば品變る、そこに一種の興味を感じるではないか。

その夜、母娘は郷里テキサスに向けニューヨークを出發した。筆者はステイションに見送つて、最後の別れを告げた。さうして何年かの後、この少女の相手となり、ヘルマンの役を務むる男はどんな男だらう等、色々の事を考へながら獨りでホテルに歸つて來た。

歸朝後の筆者は、再び臺灣に腰辨生活をつゞけることになつた。さうしてホイト母娘との文通はその後も續けられてゐた。間もなくドロテアはハイスクールを卒へて、カレツヂに進んだことを知らして來た。然るに世界大戰の開始直後にドロテアから筆者に宛てた手紙の中には『この戰爭の結果獨逸にゐる、祖父母その他親類達の身の上が案じられてならぬ。お前はこの戰爭を何と考へる。戰爭は罪惡だ。日本も、亞米利加も局外中立でありたいものだ』と書いてあつた。併しこの手紙が筆者の手に届いたのは、日本が、自ら大戰に参加し、青島に出兵した後のことであつた。ドロテアはまさか日本が、獨逸と戰爭しようとは思はなかつたであらう。然るに日本ばかりか、彼の女の父の國亞米利加は、母の國獨逸と戰ふべき運命にまで進んでしまつた。

筆者はドロテアに返事を書くことを躊躇した。さうして彼の女からも、それ以來何等の音信がなくなつてしまつた。國交斷絶は日獨兩國間のみではなかつた。斯くまでに親しみ深かつたホイト母娘と筆者との間にも、國交斷絶の悲しみを見るに至つた。

それにしても、氣の毒なのは雜婚の結果、生れ出でた子供達の運命である。あの可憐な少女ドロテアが世界大戰によつて受けたところの心の悩みを察するとき、筆者は同情無限の涙を禁じ得ないのである。愛に國境はない。併し子孫の將來を考ふるとき、可成雜婚は避け度いものだ。特に植民地統治上、雜婚政策には考慮の餘地が多分に殘されてゐる。

嘗て佛蘭西の動亂は、獨逸の青年男女ヘルマンとドロテアを相結ぶの動機を作つた。然るに世界の大戦は、少女ドロテアと筆者との間をすつかり斷絶せしむるの原因を爲すに至つた。それにしても、二十年前、ニューヨークに別れた十五歳の少女ドロテア、今は三十五歳の女盛り、恐らくヘルマンに匹敵する様な美丈夫を夫に迎へ幸福極りなき人生を營ん

でゐることであらう。

『新婚旅行は、きつと日本へ!』といった少女ドロテアの無邪氣な子供らしい言葉は、今だに筆者の耳底深く刻みつけられてゐる。然るに彼の女と、彼の女の夫たるべき人とを、櫻咲く日本に迎ふるの日は遂に來なかつた。筆者はたゞ今も尙ほ彼の女の上に榮光あれと祈るのみである。

先づこの三點から

我國農村の疲弊困憊は、必ずしも今日に初まつたわけではない。しかるに今や我國の農村は疲弊困憊の境を越えて『恐怖時代』を出現し、農民は飢餓線上に彷徨してゐる。

我國農村疲弊の遠因は、過去久しきにわたり『中央集權』及び『都市中心、商工偏重』の政治が行はれた結果であり、その近因は現内閣の金解禁、消費節約、緊縮政策の必然的結果として、農産物の大慘落を來し農民収入の激減を招來したことに基因する。

『都市中心、商工偏重』の政治は西洋模倣の物質文化にその源を發してゐる。故にこの時弊を一掃するには、先づ政治上において『中央集權の制度』を緩和し、更に産業上においては『都市中心、商工偏重』の方針を改め、政治經濟共に、農村、農民を中心とした『精神文化』の建設に最善の努力を傾倒しなければならぬ。

吾人は素より『経済日本』の建直しに反対するものではない。しかしそれよりも、もつと大切なことは『精神日本』の再建である。『経済国家よりも精神国家！』これが今日の行詰まつた日本の國狀を打開すべき唯一のスローガンでなければならぬ。しかもこの目的達成のためには、もう少し日本の政治が農村を顧み、農民に親切でなければならぬ筈だ。

今日の農業は、どう考へて見てもまうけがない。まうけがないから、そこに農民の生活苦が展開される。いくら働いても働いてもまうけのない農業、それが現在日本の農業である。今や三千萬農民ごとごとく『働ける失業者』だ。米が豊作で悩む農民、『豊年地獄』のドン底に突き落とされてもがく農民……このまゝ進んで行つたら日本の農民は一體どうなるだらう。

昭和五年に於ける農産物の値下りによる農家の損失は實に十二億五千萬圓に達した。それに財産収入、労働収入の減少をも加へるならば、十三億圓にも達するであらう。それから支出の減退を差引いて見ても、農家の純収入減は八億圓を下らぬ。故に農家一戸の損失額は約百四五十圓にあたる。

農家の収入は激減したが、負擔は更に減らない。現今農家の公租公課の負擔は一戸當り九十三圓、一人當り十六圓だといふ。しかも収入に對する負擔の割合は商工業者に對し二倍乃至三倍だと稱せられてゐるからたまらない。

現内閣は昭和六年度において六百萬圓ばかりの地租減税を行ふといふが、地方税には何等の輕減がない。しかるに今日農村の負擔の八割三分七厘は地方税だ。この地方税に手を觸れない減税は全く意味をなさぬ。單に減税せんがための減税では、事務の繁雜を來す以外に何等得るところがない。農家収入の五割乃至八割を公租公課に納めねばならぬといふ今日の農民は、正にその生存權までも奪はれんとしつゝあるのだ。

更に農家の負債は四十億圓乃至五十億圓を算し、甚だしきは六十億にも達すると稱せられてゐる。故に一戸平均七八百圓から千圓の負債となる。しかも高利短期の借金の少くない今日、四五億圓の利拂は容易でない。

過重の負擔と巨額の負債、これが今日の行詰まつた農村經濟を特に壓迫する二大横綱である。債鬼前門に迫れば、税鬼後門をうかゞふといふのが農村今日の實情ではないか。公

租公課が納められずに差押へを食ふ。延納不納の團體運動が起る。借金の利子、掛買金乃至は電燈料の不拂、そればかりではない、役場吏員及び學校教員の減俸から、その不拂に至るまで、農村の實情は實に陰慘にして寒心すべきことのみだ。

立憲政治の要諦は國民所得の公平を期することだ。特に弱き者の悩みをよく顧みてやるところに眞の立憲政治はあり得るのだ。農産物の惨落に悩める農民、負擔の過重と負債の重荷とに疲れ切つた農村：これを救ふの道は、たゞ負擔の軽減、負債の整理、さうして農産物價格の維持安定の外にはない。農村問題の解決は先づこの三點から進め！

——昭和六・六・三——

その根は深く祖國の土に

農村よ、何處へ行く？ このまゝ進めば日本の農村はローマの二の舞だ。

ローマ衰滅の原因は無論一、二にして足らぬ。併しその最大原因は、内國農業の頽廢そのものであつた。元來ローマ國民は尙武、尊農の民であつた。即ち我等は士農兼備の國民を先づローマ帝國に發見するのだ。然るに斯くの如きローマ國民も、植民政策遂行の結果、四方八方に大なる領土の發展を遂げ、無数の異民族を包擁するに至つた。従つて食糧その他の農産物は、各地の新領土よりローマに運ばれ、必ずしも内國農業の維持發展に努力する必要はなくなつた。斯くて内國の農業は奴隸に一任して顧みられず、土地の兼併は盛に行はれて、所謂不在地主の出現となり、農民の多くはローマ市の賑盛を目ざして農村を棄て、農村は益々荒廢して、遂に昔日の面影を留めず、而も農村の頽廢は遂にローマ帝國

そのものを滅亡に導いてしまった。

嘗てマルチンは『ローマ大帝國は、世界無雙の強大國であつた。併しこの強大國も、遂に内國農業の頽廢と闘つて勝つことが出来なかつた』といつた。即ちローマ大帝國滅亡の根本原因は、内國農業の頽廢であり、農村荒廢當然の結果である。

日本民族はローマ人と等しく、士農兼備の大國民であつた。我建國の大精神は農村を中心とした精神文化の建設に在つたことは、今更いふまでもない。然るに明治維新の大業達成後に於ける日本は、國家の政治的統一を鞏固ならしむべく、中央集權の制度を採用した。更に國富増進の急務に促されて、商工偏重の國策が行はれた。而も明治大正六十年間の歴史は、一も西洋、二も西洋、西洋模倣の物質文化に終始一貫して來たのがその全部であつた。故に日本の新文化は、正に都會を中心とした、本能第一主義の物質文化であり、更に商工業を中心とした黄金萬能の物質文化である。即ち新日本の文化的施設は、都會に厚く、農村に薄い。そこに我等は都會發展の誇を感じると同時に、農村疲弊の悲しみを發見し、商工業賑盛の喜びを有すると同時に農業停頓の惱みを痛感するのだ。

如此、農村行詰りの遠因が、日本國民が建國の大精神を忘却し、徒らに西洋の物質文化を模倣したことに在りとするならば、今日の行詰つた農村を根本的に打開すべく、我等國民は速かに建國の大精神に更生しなくてはならぬ。而もこの秋に方り、我等の御年若き聖天子が、朝見式の勅語中に『模倣を戒め、創造を勗め』と仰せ出されたのは、確かに九千萬國民をして、建國の大精神に更生せしめんとせらるゝ、大御心ではなからうか。即ち昭和維新の大業は、速かに西洋模倣の物質文化の時弊から、日本の國家を匡救し、新に農村中心の精神文化を建設することである。即ちこれが昭和維新の國是でなくて何であらう。

然るに我國の政治は、今日も尙ほ依然として、この大國是に逆行し、何等國運の進展を發見することが出来ないではないか。

今日の深刻な不景氣、さうして失業者の續出、更に諸物價の大暴落……斯くて國民生活は殺人的不安の極に達し世相は益々險惡ならんとしてゐる。而もこの憂ふべき世相に於て、現内閣諸公は、その罪を一も二もなく世界不景氣に歸し、以て自己の責任を廻避せんとし、あらゆる強辯を試みんとしてゐる。

無論世界は一般に不景氣だ。併し世界不景氣の眞只中に在りながら、不景氣知らずの國がないでもない。而も日本の不景氣が世界中で一番深刻だといふならば、そこに日本獨特の原因がなければならぬ。然らばその特殊の原因は何であらう。いふまでもなく、それは現内閣失政の結果である。

即ち内に在つては誤れる時期に於て、不當の方法を以て準備なき金解禁を速行し、極端なる財政の緊縮を行ひ、且つ消費節約を極度に勵行し、内國の産業と、國民の精神とを、全然萎縮せしめた。更に外に對しては、盛に退嬰軟弱の外交を試み、爲めにロンドン條約の結果、國防を不安に導き、對支、對露の外交を極端に行詰らしめたる等、今や我國の内治外交は正に不安の極に達せんとしてゐる。而もその間、特に行詰りの甚大なのは、農村であり、農民ではないか。

極めて端的にいふならば、一部少數の金融資本家を除くの外、九千萬國民悉く、經濟的に、致命傷を受けてゐるのが、今日の實情であるが、就中その損害の甚大なるは實に農民である。

満價、米價の大暴落を初めとし、例外なき農産物の大慘落は實に驚くべきものがある。而も現内閣の低物價政策からいふならば、尙ほ下り方が足らぬといふかも知れぬ。併しこれを前年に比すれば、實に十二億圓の大激減である。而もこの大損失を他に轉嫁すべき何物をも有しないといふのが農民であり、そこに我等は原始産業の悲哀を痛感するので。

而も農家負擔の現状を世人は何と見る。筆者は、茲に細かい數字を以て説明することは、これを避けるが、大體から論じ、現在農村民の租稅公課の負擔は、これを都市生活者に比すれば、實に二倍の多きに達してゐる。然るに農家收入の半減したる今日、その負擔には何等の輕減がない。現内閣が目下議會に提案中の減稅案の如き、この見地からいへば殆んど論ずるに足らない。これを貨幣價值の向上と、農産物の大暴落とから論ずるならば、事實、農民は二倍の増稅を受けたと同様の結論に到達せざるを得ない。

更に全農家の負債總額は約五十億圓と稱せられてゐる。故に農家は一戸平均約九百圓の負債を有する計算だ。而もその負債たるや、家計上の必要から費消せられたものが頗ぶる多きを占めてゐる。即ち高利不生産的な負債に悩み切つてゐるのが、農村の實情ではない

か。而も、貨幣價値の吊り上げと、農産物價格の下落とに依る農家の打撃は、直ちにこの高利不生産的な負債の償還に大なる困難を感じしむるに至つた。

その他擧げ來れば、現内閣失政の結果、農民の受けた打撃は、數限りもないが、要するに農村は不景氣、失業、物價慘落等々に依る、總ての損失の最後の『掃き溜』であり現内閣失政の『總精算市場』である。

現内閣は、日本の不景氣は、世界不景氣の結果だと稱し、更に世界不景氣の原因は、生産過剰の結果だと辯じてゐる。この筆法で行くならば、米價今日の暴落も、生産過剰の結果だといふことに、その遁辭を發見し得るだらう。併し生産一割餘の増産に對し、價格四割餘の慘落を何と見る。米一俵が六圓しかしない。それで肥料代や租税が拂へるだらうか。否な拂ひ得たとして、彼等は食つて行けるだらうか。人間は先づ生きねばならぬ。生きんが爲めには食はねばならぬ。食つて餘りあらば、そこに初めて租税負擔の能力を發揮することになる。従つて食つて餘りなければ借金をして租税を納むるか、さもなければ、租税滯納の外に途がない。前者に従へば、さらぬだに負債に悩みつゝある農家は、更に借金の

苦しみを重さねて行かねばならぬ。後者に従はんか、納税の義務を果し得ずして、國庫は勿論、府縣市町村の歳入に大なる缺陷を生ずることになる。而もこの缺陷を防止せんが爲めには、苛斂誅求の外に途がない。

世人は、小學教員俸給の支拂不能及減俸、並に薄給なる公務吏員の減俸が頻々として全國到る處に行はれつゝある現状を何と見る。このまゝ進むならば、總て自治體の破壊となるであらう。斯くて農村中心の精神文化建設の如きは夢想だにすることが出来ないではないか。

世人は、昨年の米作を豐作飢饉だといつた。併し筆者はそれを『豐年地獄』といひ度い。今や三千萬農民は所謂豐年地獄のドン底に突き落されてゐる。而も全國の農民は正に舊節季に直面し、債鬼門に迫るの慘狀を見んとしてゐるにも係らず、政府は何等これが救済の途を講じてゐない。否な寧ろ政府自ら赤鬼、青鬼となり、農民を閻魔の廳に引きすり出し、其の鼻をそぎ、耳を切り、舌を抜かんとしてゐるではないか。これをしも惡魔の政治といはずして何といはう。

近代日本の文化は西洋模倣の物質文化であることは既に述べた。そこに都會中心の政治が生れ、商工偏重の國策が出現するのだ。筆者はこの缺點を歴代の政府に發見する。併し現内閣の如く一部少數資本家の利益を擁護し、多數國民の福利を度外し、殊に地方農村に冷淡な内閣を嘗つて見たことがない。而も精神文化は神性に出發し、物質文化は獸性に出發したるを思ふ時、神の畫ける農村中心の精神文化を無視し、惡魔の理想とする都會中心の物質文化を偏重する現内閣の政治はこれを惡魔の政治といはざるを得ない。而して我國に惡魔の政治が存續する限り、我國の農村はローマの二の舞たらざるを得ない。ローマ帝國を衰滅に導いたのは、内國農業の頽廢そのものであつたことを思ふとき、我等は我國の前途に對し寒心せざるを得ない。

農村よ何處へ行く？ このまゝ進めば、日本の農村はローマの二の舞だ。それで果して日本の國家はよいのであらうか。

筆者はいふ。三千年の貴き歴史を有する祖國日本の國家的生命を未來永劫ならしむるのは日本民族の全使命ではないか。而もこの大使命を全うせんが爲めには、今日速に建國の

大精神に更生しなくてはならぬ。

日本建國の大精神は、神武大帝御東征の御宣言中に『天業を恢弘し、天下に光宅せん』と仰せ出されたところに窺ひ知ることが出来る。即ち天業とは、天の心を中心とする文化を營むの業であつて、今日の所謂『精神文化の建設』である。而もそれは單に日本内國に限つたことではない。我々日本人の手に依つて建設した精神文化は、これを普く全世界に押し廣め、全人類の幸福を平等に増進し、我等日本人の手によつて眞の世界的平和の殿堂を、現實の地上に建立せんとするのだ。換言すれば、先づ以て農村中心の精神文化を建設し、それを根源とし、日本の農村を世界到る處に延長せんとするに在るのだ。

如此、我等の祖先の抱負は、實に廣大無邊であつた。然るに現代の日本民族が、この雄大なる建國の大精神を忘却し、只だ徒らに西洋の物質文化を模倣し、現下の憂ふべき世相を誘引し、遂に農村今日の行詰りを生むに至りしが如き實に國家の一大痛恨事だ。故に今日の急務は、この行詰つた世相を一掃することだ。而もこの大目的を達成せんが爲めには我等日本民族が建國以來、絶えず民族的スローガンとして把持して來ながら、未だ完全に

達成し得なかつた大使命を速に達成しなくてはならぬ。然らばその大使命とは何ぞや。それは内、内國の農業保全に努め、外、移植民の大政策を遂行することだ。

日本の農村よ何處へ行く？ その根は深く祖國の土に、而してその枝は遠く海を越えて波のかなたに！

—昭和六・二・二—

帝制華かなりし日

僕が臺灣總督府の命に依り、獨逸に留學したのは、明治四十二年であり、その年の八月末から滿二ヶ年をベルリンに暮した。併し夏休みの多くはこれを旅行に費したから、今更ベルリンの夏の思出を書く程のことはない。

ミルク色の花咲くカスタニエンや綠色濃きリンデンの路傍樹に飾られたベルリンの夏は確かに一種のやはらかみを感じしむる。炎熱灼くが如き臺灣生活から抜けて來た僕に取りてベルリンの夏は少くとも極樂であつた。北歐の落ち付いた靜かな夏の街に、時折冥想に耽つたことのあつた當時を思へば、もう二十年も前のことである。

その頃は僕もまだ若かつた。さうして意氣も頗ぶる旺んなるものがあつた。……今古き日記の中からベルリンの夏を回顧するに足るべき二三の記事を摘出して見ることにする。

ベルリンにも夏が来た。天氣が馬鹿によいので今日の午後を獨りチャ・ガルテンに足を運ぶ。リンデンの緑が、すっかり濃くなつて来た公園の晝は静かだ。到るところのベンチは残りなく人に占領されてゐる。子守片手に靴下を編んでゐる年増女や、乳母車を押す子守達が特に多きを占めてゐるが、中には本や新聞に讀み耽つてゐる紳士も少くない。

チャ・ガルテンの晝のベンチはこんな風に無邪氣な子供や女達の占有に歸してゐるが、一度太陽西に没し、夜の幕がおろされた後のチャ・ガルテンは、丸で局面が一變する。このベンチ、かしのベンチ、相抱擁する男女の群れ……暗黒に閉された夜のベンチと、光明に満ちた晝のベンチとはかうもちがふものか……併し考へて見ると、兩者異なるやうでその實は相同じだ。たゞ夜は晝の影であり、晝は夜の産んだものたるに過ぎない。

こんなことを考へながら池のほとりのベンチに腰をおろして、靜かに水の面を眺める。ボートを浮べた男と女、母と子供！ 中には若い少女のたゞ一人、友ほしげなるもある。一羽の小鳥が前の草原に餌をあさつてゐるかと思ふと、右手の小藪に鼠が一疋小走りに

走り過ぎた、何といふ静けさであらう。

僕は札幌植物園の夏の池畔を思ひ出した。自然も、空氣も札幌そのまゝである。……僕はベルリンに来てから臺灣を思ひ出すやうな場合は、まだ一遍もない。獨逸は何といつても『北の國』だ。

—明治四三・七・二—

今やベルリンの街は到る處、花壇を以て飾られてゐる。緑の路傍樹と對照して、特に美しさが目につく。これもベルリンの夏の風景の一つである。

日本では大抵な家には庭がある。一寸縁日に行つて買つて來ても、また種子屋から種子を買つて來て播いても、花位はわけもなく前庭に眺められる。ところが西洋の街では庭がない。四階も五階も上に住まねばならぬ運命に置かれた人達は僅かにバルコンに、かたばかりの花を飾つて見る位が關の山だ。さうなると公園や、ブラツヤ、路傍に植ゑられた花を賞して楽しむより外に途がない。この邊は日本人の生活とはちがつて餘程共同的であり

社会的である。だからこんな方面に支出する市の豫算も決して少くはないが、市民はだまつてその費用を負擔する。併し若もこれが日本であつたらどうだらう。江戸ツ子達はきつと『ペランメー……街の眞中に花なんか植ゑなくても、裏の庭先に花はいくらでも咲いてゐらあ』……かういつて尻位ひまくつて見せることであらう。併し東京だつて、今にベルリンと同じ様な時代が来るのではなからうか。

——明治四三・七・一三——

夏の寢覺めを慰めてやらうといふ親切から、下宿のお婆さんが丹精をこめて育て上げて呉れたバルコンの『朝顔』が今朝から咲き初めた。日本から渡來したのだとお婆さんはいふが、すつかり退化して花が馬鹿に小さい。併しそれが祖國の花だと思ふとたゞ何となくなつかしい。何れの色もそれ／＼の趣はあるが、中にも紫や白が特に美しく見える。

『植ゑて見よ花の育たぬ里はなし』……併し、それは、ひとり花のみではない、人間また然りである。『植ゑて見よ人の育たぬ里はなし』……天涯地角何れのところか人間安住の地

たらざらんやである。然り植民よ！

——明治四三・八・四——

◇ ◇
A 學士と夕方近く夏の街を歩きながら、ウンター・デン・リンデンに出ると、丁度カイザーがシュロツシュに向け、自動車を走らしてゐるのに出會つた。

『カイザーは凡てを爲さんと欲し給ふ』とは僕が或獨逸人に聽いたところだ。ほんとに彼は斯く信じ且つその所信を行はんとし、行ひつゝあるのだ。『世界の支配者たらん』とはカイザー一生の望みであらう。併しこの大なる野心を實現すべく、カイザーは餘りに輕い調子である。……彼の一舉一動には何等の『重み』がない。無論活動は凡てを爲すの素因である。併し眞に偉大ならんとするには『重み』と『瞑想』とを必要とする。重みのない活動は輕卒に流れ、瞑想なき活動は淺薄に終るものだ。カイザーの活動に果して『重み』と『瞑想』との用意があるだらうか。僕は自動車を走らせ給ふカイザーにその片鱗だも發見することが出来ない。

今や獨逸は眞の黄金時代に到達し、カイザーの得意満面思ふべきである。併しこの黄金時代は果して何時まで續き得ることであらう。ベルリンの夏の夜は短かい。そのみじか夜の如く、獨逸の黄金時代も案外その前途は短かいのではなからうか、さうして夜の明けると共に、カイザーその人の得意の色も段々うすれ行くのではなからうか。

——明治四三・八・一四——

◇ ◇

東京の妻から頻りに月のよいことを報じて来る。さうしてベルリンでも同じこの月が明るいことだらうと書いてある。併し僕はベルリンに来てから月を見ようと思ふ觀念が少しも起らなくなつた。

詩人はロンドンの月を讚美してゐるから、ベルリンの月も、きつと讚美に價ひするのだらう。都の月！ 下宿のバルコンから見た月！ かう考へて来ると、ベルリンの月も確に詩を思はする。こんな様な冥想に耽りながら、何心なくバルコンに出て見ると、天空には一點の雲だになく、澄み切つた大きな夏の夜の月が靜かに下界を照してゐた。

何處で見ても美しいのは月だ。何時眺めてもなつかしいのは月だ。僕は東京の人の言葉を成程さうだと思ひ出さずにはゐられなかつた。

遠く離れて會ひたいときは

月が鏡となればよい

この月の明るさでは、もう夏も末に近づいた。間もなく涼しい秋の風がベルリンの街を訪れて來ることであらう。

——同じ年の八月の或夜——

グレイプ・フルーツ

このあひだ街を歩いてみると、或水菓子屋のショー・ウインドーに陳列してある亞米利加のグレイプ・フルーツが眼についた。

グレイプ・フルーツに就て筆者には忘るゝことの出来ない思出がある。それは、もう二十年も前のことである。筆者が獨逸二ヶ年間の留學を終へ、更に愛蘭問題研究の爲め英國に滯留すること二ヶ月。斯くて亞米利加に向け、サバンプトン港を出帆したのは、明治四十四年十二月三日の夜であつた。

船は獨逸汽船、ブレジデント・リンカーン號、話は一等食堂の食卓から始まる。

筆者と食卓を共にする船客は總て六人であつた。即ち筆者の右一番目が若いポーランド人、この男は獨逸語は話すが英語は解らぬといふ、町家の息子らしい顔をしてゐる。そ

の次はサラサの黒地に模様のある服をよく着て出るお婆さん、英獨兩語を話す、どうも英國種らしい。その次がこの婦人の亭主である。豚の如く肥え、一見屠牛屋のオヤヂさんといふ感じがする。よく食らひ、よく飲む男であるが、この夫婦はどこから見ても、移民の成り上りとしか思はれない。

その次も亞米利加の住人、プロフェッサー然とした態度で、如何にも餘裕のある老人である。獨逸人を女中に使つてゐる等いふところを見ると英吉利種らしいが、獨逸語も達者である。更にその次、即ち筆者の左隣は、若い英吉利人である。毎日ネクタイを取り換へるし、洋服もなか／＼ハイカラである。僕達の食卓で晚餐の第一夜にドレスを着込んで出たのは、この男一人。併し次の日からは、この男も脊廣で通したが、如何にも英吉利人らしい男振りを見せてゐた。

この人達が毎朝食べる果物が、いかにも美味さうである。丁度夏密柑を大きくした様な形で、肉が白味を帯びて汁が多い。筆者も一つ食べてやらうと思つて、メニューにそれらしいものを探して見た。アツブルだの、オレンジだのといふのが目に付く。その外にグレ

ープ・フルーツといふのもある。グレーブは葡萄である。それにフルーツがついてゐるのは蛇足だ。變なこともあるものだと言をひねつて見たが解からない。結局これはオレンヂの類だと考へて、ポイーに命じた。然るに運ばれたものは、ネーブル・オレンヂで矢は的を外れてゐた。こんなことが二朝も三朝もくり返されたが、遂に目的を達し得なかつた。

問題は頗ぶる簡單だ。隣席の人に『お前の食べてゐるその果物は何といふのだ』と質ねればそれで事は足りる。併しそこが瘦せ我慢の強い日本男子だ。『我輩は日本の農學士だ、この果物の名を知らぬでは、祖國の學問に泥が着く、よし、質ねてたまるものか、今に質ねずとも解る時が来る』と持前の強情を出して、きくのをやめにした。そのかはり、たうとう船がニューヨークに着くまで、そのうまさうな果物にありつく機會がなく、恨みを残しながら船を乗り捨て、遂に亞米利加の土を踏むことになつた。

然るにニューヨークに着いた晩のことである。船中で懇意になつた、ホイト母子と、ホテル・アスターで晚餐を共にした。食事の選擇は一切ホイト夫人に委せることにした。すると夫人は色々料理を注文した後、筆者に向つて『果物はグレーブ・フルーツでよいか』

と質ねた。筆者は直ちに『それでよろしい』と答へた。

聽て卓上に運ばれた果物を見れば、こはそも如何に、筆者が船中で食べ度いと思ひながら強情の犠牲となつて、遂にその目的を達し得なかつた果物そのものではないか。：『オウ汝の名はグレーブ・フルーツよな』と心の中で叫びながら、スプーンを取つた時のうれしかつたこと、その美味かつたことは、今だに忘れることが出来ない。

凡ての事は『時』が解決するものだ。筆者は日本の農學士の自負心を傷けることなくして、遂にその目的を達し得た。さうしてその後は、眞からのグレーブ・フルーツ黨になつてしまつた。さてさうなると、農學士の手前、その戸籍調べから始めなくては承知が出来ぬ。主産地はフロリダ州であり、名の起りは、枝に實つた形が密生して丁度葡萄の房の様に見えるところから來たことまで、すつかり研究が出来た。

併し、もう一つこの美味い果物が日本で食べられないのは、いかにも残念だ。フロリダの生産だといふからには、我が臺灣に出來ない筈はない。きつと臺灣の園藝試験場には夙に試作されてゐるだらう。若しまだ輸入されてゐないとしたならば、一つこれが試作を主

張しなくてはならぬと考へながら、臆て、亞米利加、ジャマイカ、玖瑪等の視察を終へ、太平洋を横切つて、丁度三年振りに祖國に歸つて來た。

歸朝後の筆者は、引き続き臺灣に腰辨生活を營むことになつた。然るにグレーブ・フルーツは未だ總督府の園藝試験場にもこれを見出すことが出来なかつた。そこで筆者は直ちに場長のH技師に試作方を熱心に要望した。斯くて間もなく、苗木は輸入せられ、士林の園藝試験場に何本かのグレーブ・フルーツが試作せらるゝことになつた。

その後歲月は流れて大正九年となり、H技師が南洋に志を伸ぶべく臺灣を辭した頃にはもう立派に結實を見るに至り、試験場産のグレーブ・フルーツは我等の試食を待つまでになつた。筆者は自分の希望の達成せられたことを喜び、且つその成長の益々盛ならんことを期待しつゝも、大正十三年には、政界進出を志し、自ら臺灣を辭去することになつた。

爾來滿七年、その後の成績に就て多くを聽かないが、併し恐らく順調に成長、蕃殖を續けてゐることであらう。然るにH農學士は、その後南洋より歸りて、居を市外松澤村に定め、將來の發展を企畫してゐた甲斐もなく、遂に病を得て、去る五月十日空しく長逝する

に至つた。筆者は彼の葬儀に參列し、往時を追憶し感慨禁じ難きものがあつた。

グレーブ・フルーツを臺灣に輸入し、これが試作の實務に従事した彼は、今や逝いて永遠に還るの日とてはない。併し彼の移し植ゑたグレーブ・フルーツはあの房々とした美しい實を結びながら、永久に南島の秋を飾ることであらう。而もその今日あるに至つた源泉が筆者に在るを思ふとき、我も亦た一種の誇を感じざるを得ない。

文字なき者の教訓

大正十三年一月、筆者は次の總選舉に立候補すべく、大なる決心を以て臺灣を去り、郷里に歸つた。その翌日、病重くして餘命幾許もなき長姉を病床に見舞つた。姉は久し振りの面會に病苦をも打ち忘れたが如く喜んで呉れた、さうしていつた。

『お前は代議士志願だといふが、今日の安全な地位を棄てゝかゝるといふからには豆腐作りの稽古は立派に出來て居ませうね。』

姉の顔は俄かに曇つて來た。代議士の末路は『身代限り』だ、『井戸堀』だといふ、世間の噂を耳にして居る姉は、弟の前途を眞から心配して呉れるのである。

『なぜ豆腐作りの稽古が必要なんです。』

『代議士の末路は豆腐賣りに成るのが關の山だといふではありませんか。お前が代議士を

志願するなら先づ豆腐作りの稽古が先決問題ではありませんか。』

姉は微笑をたたゝへながらかう答へた。筆者は自分の固き決心を姉に告げ、さうして豆腐作りの稽古の必要な旨を物語つた。姉は始めて安心したやうな顔色を見せ、

『それで姉も安心して死ねます。一旦政界に志す以上東郷の家名を汚さぬ様男らしい働をして下さいね。』

姉の頬には熱い、涙が流れてゐた。

『御安神なさい、屹度姉様の御期待に副ふ様に努力いたしますから。』

姉は痩せ衰へたその手をさしのべて、筆者の手を握つた、さうしていつた。

『屹度ですよ、お願いしますよ。』

その後筆者は初陣の地盤開拓に寸暇なく家を外に各地を走り廻つてゐた。然るに姉は選舉の日をも待たず、とう／＼永遠の眠りに就いてしまつた。

姉は無學であつた。併し武士の家庭に生れ、立派な武士道的教育を受けてゐた。彼女の女の臨終はまことに立派であつた。死期迫るを知つた姉は義兄はじめ家族達を枕頭にさしま

ねき、自らも床上に正坐し過去六十年間の生涯を感謝し、死後の處置に就て事細かに遺言をした後心靜かに眠るが如く逝いたときいた。

姉の死をきゝ出張先から歸り見れば、『豆腐作りの稽古が出来てゐますか』といった姉の唇は今や固く閉されて再び開くよしもなかつた。

——昭和七・五——

臺南に於ける或日の思出

涙なくば花に露なき朝のごと

うつし世いまは趣なくあらめ

この歌は筆者札幌在學當時の駄作であるが、人間は涙に産れ、涙に生き、涙に死すべき運命の持主である。故に涙なき人生は丸で沙漠のやうなものだ。それにしても思ひ起すのは臺南に於ける或日の出來事である。

それはもう二十四、五年も前のことである。或日新渡戸先生の御伴をして大目降(新化)の糖業試験場を視察し夕暮近く臺南の旅館東屋に歸つて來た。さうして受持女中の顔が何時になく曇り勝ちなのに氣の付いた先生は、彼の女にたづねた。

『お前は今日に限つて、晴れない顔をしてゐるが、それには何かわけがあらう。』

女中は郷里に残した一人の子供が今日亡くなつた電報を受け取つた旨を答へた。先生の顔には俄に一抹の曇りがかゝつたかと思ふと、靜かに考へ込んだ。間もなく先生は宿の女主人をよんだ。さうして次の様な會話が兩者の間に交はされた。

『わしはこれから芝居見物に出かけることにした。就ては係りの女中も連れて行き度いから御迷惑でも承知して貰ひ度い。』

『あの娘は國元の子供が死んだといふ知らせに悲しんでゐる最中でございますから、芝居見物はいかゞと存じます。依つて他の女中を御伴致させませう。』

『いや事情は、よく承知してゐる、だから特にあの女中を所望するのだ、直ぐ用意をさして呉れ、さうして御神さんもいつしよに行くがよい。』

斯くて私達の芝居見物は成立した。さうして彼の女は芝居のはねるまで、とめどもなく流れ出づるその貴き熱き涙を絶えず拭ふてゐた。併し彼の女の涙が子供の死に對する悲しみの涙であることに氣のついた観客は、無論一人もなかつた。

芝居から宿に歸つて來ると先生は筆者に向つて次の如く語つた。

『子供が死んだといふ悲しみのその日に芝居見物等とは如何にも慘酷のやうに思はれるが決してさうでない。世の中に奉公ほどつらいものはない。こんな場合女中部屋に引籠つて泣いてばかり居るわけにはゆかない。お客様に不愉快な顔を見せまいとするその努力は大抵ではない。それには、どうしてもはたの者が泣場所を作つてやらねばならぬ。日本の芝居は喜劇よりも悲劇が多い、従つて笑ふ場面よりも泣く場面の方が遙かに多い。芝居を観て泣くのは人情だ、それがお客の前だらうと主人の前だらうと泣くのに遠慮はいらぬ。子供を亡くしながら思ふ存分に泣き得ない境遇におかれた氣の毒な女に泣場所を與へ、貴いその涙で心の悲しみをすつかり洗はしてやるのは、私達の爲すべき務めではなからうか。』

筆者は先生のこの深き思ひやりを聽いて、まことに貴いことだと思つた。さうして今だに意義の深かつたその日の芝居見物を忘るゝことが出来ない。

筆者は重ねていふ、人間は涙に産れ、涙に生き、涙に死ぬるものだ。人間から涙をもぎ取つたら、一體後に何が残るだらう。特に女から涙を取去つたら残るものは只僅に醜い屍のみではなからうか。

悦れしくても泣き、悲しくても泣く、これが人間である。人間感情の極致は常に涙だ。故に筆者の涙に對する禮讚の氣持は五十の坂を越した今日でも、若かりし日のそれと少しも變りはない。

涙もてこゝろ洗へばわが心

かるくもなりぬ樂しき世かな

それにしても、嘗つて芝居見物に心ゆくばかり泣き得た臺南の一女性は、今どうなつてゐるだらう。

——昭和八・一・一——

友邦たるの心

神武天皇御東征の御宣言の中に『天業を恢弘し天下に光宅せん』と仰せられてゐるが、天業とは天の心を人類文化の中心として、營むところの業であつて、今日の言葉を以てすれば精神文化の建設である。精神文化とはいふまでもなく農村を中心とし、農業を尊重する文化である、而かもこれを恢弘し天下に光宅せんとは、單に日本内地に限らず、廣く精神文化を全世界に普及し、全人類の幸福を平等に増進し、世界平和の樂土を日本民族の手に依つて建設せんとするにある。斯くの如く日本建國の大精神は宏大無邊なものであつた。最近滿洲國獨立に際して、我日本は國際聯盟脫退をも厭はず其の獨立を承認し、國を擧げて援助建國の大業達成に向つてあらゆる犠牲をも顧みずして、邁進してゐる所以のものは、此建國の大精神に淵源してゐるのである。即ち我國の精神文化を基礎として、滿洲に新し

き國家を確立し、多年の惡政に苦惱し來つた三千萬民衆に平和と幸福とを與へ、東洋の平和を克復し更に進んでは世界平和に對する大使命を達成せんとするのが、その根本の目的であることは云ふまでもない。

私は明治三十八年札幌農學校を卒業し、この建國の大精神に出發して植民政策を專攻することを決心し、農業植民論なるものを卒業論文として研究發表したのであるが、卒業後先輩の勧めにより上梓出版するに當り『日本植民論』と改題した。その所論の骨子はあくまでも日本内地の農村農業を保全し、精神文化の健全なる發達を期し、更に海を越えて海外到る處に日本の有する精神文化の普及を圖り、あらゆる民族に惠澤と平和とを均霑せしめんとする大經綸を行はんとするにあつた。其の抱負は先づ近接せる亞細亞大陸から——即ち朝鮮滿蒙へと新天地を開拓すべきことを強調したものであるが、日時の経過は自然にこの問題を解決して、先づ日韓合併によつて其の第一歩は實現せられ、次いで今回の滿洲國の獨立によつて第二段的に進展し、若冠の頃の所論がこゝに如實に實現されたのを見て、誠に愉快に堪へないものがある。

私が植民政策を專攻した關係から、臺灣に官吏として職を奉ずること十有八年、其の間植民地の經營、異民族の實狀を具さに研究體驗したのであるが、凡そ日本の植民地經營なるものゝ全體を通じて考へさせられることは、兎角劃一主義の弊に墮し、母國延長の嫌ひが多分にあるといふことである。元來朝鮮にしる、臺灣にしる、氣候、風土は云ふまでもなく、民族的に全く日本と異り、従つて言語風俗習慣は勿論、我々とは遙かに隔絶した特殊事情に置かれてゐるものである。しかもこれに強制するに内地に行はれてゐる諸般の文物制度を以てすることは暴もまた甚しいと云はねばならない。これを我々自身について考察して見ても自ら了解するところであらう。即ち明治維新以來我國が、この利害得失を考慮する暇もなく、歐米の文物制度を模倣しこれを攝取し、かくして我國諸般の制度を確立して、こゝに明治、大正、昭和三代に互る燦然たる文化的發展をなすに至つたのであるが、それと同時に今日の經濟的、乃至思想的行き詰りを見るに至つた病源を取り入れた事は争はれない事實である。

元來文化といふものはこれを作り上げた民族特有の民族精神の外的表現であつて、これ

を他の民族に移し植ゑた場合には、名稱や形式を移すことは出来得ようとも、その内容精神に至つては殆んで不可能事に屬する。更にこれを強制的に移植するとせば、名稱、形式は同じくとも、長き歲月の間には全く民族化せられて内容を新たにしたり、別の制度として變換されて行くものである。この民族心理學上の根本原則を無視した爲に、一も西洋、二も西洋と、その物質文化を謳歌して、模倣、追隨し來たつた日本は、文物制度に於て燦然整備したが、その内容に於て轉換し得べからざる行き詰りを生じ來たつた所以である。我のこの苦き體驗を外にして、異民族を包含する植民地に對せんとするが如きは、思はざるの甚しきものである。

私は植民地統治に當つて座右銘ともすべき最もよき逸話を提供したい。彼の諸大名中名君として、其の名の高かつた吉備烈公が十三四歳の幼少の頃、京都の所司代板倉勝重に政治の要諦を質ねたことがあつた。これに對し勝重は『四角い箱に味噌を盛つて、圓い杓子ですくふ様にされたらよい』と答へた。烈公首をかしげて反問するには、『隅の方に味噌が残るではないか。』勝重更に『家康公の周圍には智勇兼備の名將があまたあるが、さすがは

幼少なれども名君であらせられる。大國といふものは一様に罫を盛つた様には參らぬ、政治の妙諦は寛なる事、寛ならざれば民心を得がたいものである』と云つたといふ。一體日本は小さい島國で北は樺太、南は南洋諸島に至るまで、颯々として連ること實に數千哩、すべて劃一的に政治が行はれてゐることは非常に缺陷があると思ふ。この劃一主義の通俗的にいふならば重箱の隅を楊子でつくやうな氣の小さいやり方では、滿洲建國の、從つて東洋平和將來の大使命を完成することは到底出来ない。内地既に然り、況んや植民地統治に於ては勝重の言の如き、寛容を主眼とする方針で進まなければならぬ。

異民族統治の要諦は、何を措いても民族心理を研究することを以て其の第一條件とする。彼の一世の英傑ナポレオンが、卑賤より身を起して遂に佛蘭西皇帝の榮冠を贏ち得た所以のものは佛蘭西國民の心理を研究検討して、其の動向に合致する様にしたからで、云ひ換るならばうまくこれを操縦したからであつた。然も彼ナポレオンが、長驅モスコに進撃して一敗地に塗れ、哀れ大西洋上セントヘレナの島に悲慘な餘生を送らなければならなかつた原因は、露西亞人の民族心理をよく諒解しなかつたからである。この引例は戰爭の

場合の夫れであるが、政治、外交、植民、貿易等、あらゆる對異民族の問題に關し、推し及ぼし以て規範とするに足る好個の題材である。この民族特有の精神を研究するといふことは、そして其の特殊性狀、環境に應じて對策、態度を決定して行くことは、最も重要なことで、殊に日本が滿洲建國の唯一無二の援助者である限りに於て、其の態度といふものは最初より明瞭にしてかゝらねば、悔を百年の後に残すに至るであらう。滿洲國はそれ自體に一個の獨立國家として對することが先決問題であり、日本の大使命遂行の上から最も賢明なる方策であると考へるのである。

勿論滿洲國が日本の植民地である朝鮮、臺灣とは全然其の事情を異にしてゐることは今更いふまでもない。従つて日滿兩國の關係は國土の特殊な相關々係にあり、多數の日本人が滿洲國官吏として内政に關係し、國防上からはこれまた關東軍が共同防衛にあたり、産業上からも相提携しなければならぬ立場にあつて、其の存在は二にして一共存共榮相互扶助して進まなければならぬから、その官吏たると、軍務に服するものと、或は民間に在住するものとを問はず、卑しくも日本人たるものは滿洲國三千萬民衆の特有の民族精神

を尊重することを何を措いても先決問題としなければならない。内地の諸制度をそのまゝ臺灣、朝鮮に強制することが間違ひであると同じやうに、獨立國家である滿洲國に強制することは尙更思はざるも甚しい。要は平和と幸福とを將來せしめることが其の使命でこの目的達成のためには日本人の氣持を強ひることなく、滿洲人の心を以て心とし、その特徴の上に諸般の制度を樹立することを心懸けねばならない。私は菱刈全權が出發に際し、或る一部の者の集つた席上、前述の吉備烈公の逸話を引いて、滿洲國の指導は須く板倉勝重の所論の如くでなければならぬことを建言したが、繰り返していふ、これこそ滿洲人をして眞に頼るに足る友邦としての信頼を得るに至る妙諦なりと信じて疑はない。

日本の國策として滿洲國になされる事業は枚擧に遑なき程多い。人口過剩に悩む日本は必然の結果として移民を滿蒙の天地に植ゑ付けねばなるまい。よしそれが最も至難の事業であつてもこれは是非遂行しなくてはならぬ。或はまた天然資源に乏しい日本は、滿洲國獨立以來屢々論ぜられてゐる日滿兩國間の經濟の統制によつて、其の原料を日本に、日本はその加工品を滿洲へ、または日本に全然資源のない羊毛及棉花等の生産を奨勵し、自産

自給を圖る等、共存共榮以て兩國は友邦として、更に進んでは同文同種の國支那を包含する東洋平和の確立に向つて邁進せなければならぬ。こゝに宏大無邊なる神武天皇日本建國御宣言の御精神は、二千六百年後の今日、飛躍的に新たなる意義と潑刺さを以て我々の胸に甦り、世界六合を併せて其の惠澤に浴せしめることが出来るであらう。これ大和民族の大使命であり、これを爲さざれば大和民族の眞價を失ふものである。

—昭和八・九—

二人の藝者

明治三十八年に、札幌農學校を卒業した筆者は、在學中に研究した卒業論文『農業植民論』——日本植民論と改題して公刊——の主張を實際に行ふべく、滿洲行を熱望した。然るに日露講和條約の結果は、この熱望を容るべく餘りに不満足であつた。そこで筆者はN博士の熱心なすすめにより、臺灣行きを決心し、翌三十九年二月初め、同博士に連れられて渡臺の身となつた。

任地は中部臺灣の舊都彰化であり、職は彰化廳囑託——殖産係長——月給八十圓、學校出立ての農學士にとりては、過分の待遇である。而もその年の六月には、彰化、斗六、南投三廳の技師に任ぜられ、二つ釘の仲間入りが出来た。さうして臺灣全島を通じて一番若い高等官だともいはれた。併し、理想に生き、主張に忠ならんとする強き熱意に燃えてゐ

る若人にとりては、これ等の總てが却つて苦痛の種子であつた。

『技師が何だ、高等官が何だ、俺の進むべき途は外に在る。二つ釘なんか、かなぐり捨てても、もつと広い場所に心ゆくばかり働いて見たい』と思ふと、もう矢も盾もたまらなくなつてくるのであつた。

その年の八月に、N博士は再び臺灣にやつて來られた。そこで早速臺北に出かけて行つて、博士を訪ねた。博士は筆者の正服姿を眺めて心から喜ばれた。筆者は自分の衷情を訴へ、最後に『先生、僕は何時までも、今のまゝでゐなくてはならぬのでせうか』とたづねた。すると博士は『自分のことは、自分でかれこれ言ふものぢやない。總ては世間の人に任せて置いて、君は死ぬまで彰化で働く決心でゐることが必要だ』といはれた。：：『死ぬまで彰化で働け』：：筆者はこの言葉を心の中で繰り返しながら、彰化に歸つて行かざるを得なかつた。

一週間の後、博士は自ら彰化にやつて來られた。その時のことである。或晚臺中の新盛閣といふ料理屋に土地の有志達から招待を受け、筆者もお供をした。いざ宿屋に歸るとい

ふ段になると、そこから二人の女性が博士を宿屋まで送つて行つた。その内の一人は十三子といふ十八ばかりの藝者、京都生れだといふので『お前の生れ故郷は、三條の橋の下だらう』とよくお客にからかはれたものだ。もう一人の女は十三ばかりの舞子、その頃の社會では本島人のお客様を『お土人さん』と呼んでゐた。然るにこの娘は、まだ舌がよく廻らないので『おドピンさん』といふので、皆に興がられてゐた。

宿屋に歸つて博士の室に行つて見ると、この二人の女達が番茶の御馳走になつてゐた。『先生、僕は明朝一番列車で彰化に歸りますが、何か承つて置くことはないでせうか』と、筆者はたづねた。博士は『何もないよ、併しね、不平はいつちやいけないよ、向上の意氣に燃えてゐる者は、何處に行つたつて不平はあるものだ、人間の一生は不満の連續に過ぎないのだ。こゝに二人の女がゐるが、恐らくこの人達は、臺灣には親も兄弟もゐないのだらう、それなのに不平一つ言はずに、自分の職務を忠實に盡してゐるではないか。この二人にくらぶれば、君は、まだ幸福過ぎる位だよ』といつた。

『二人の藝者、それよりも君の方が遙かに幸福だ！』藝者を前にこの手きびしい教訓は、

ちとひどいとは思つたが、併し考へて見ると、その通りだ。自分に與へられた仕事そのものに總てを傾け盡して働くのが人生だ。『よし俺も彰化で死ぬまで働かう。』かう決心して氣持よく彰化に歸り、一心不亂に働き續けた。

その後間もなく、十三子は花柳界から足を洗つてしまつた。さうして『矢つ張りあの女は偉らかつたんだな——』と思つた。

その年の秋になると、今度は總督府から筆者に貰ひがかゝつて來た。三人の廳長達も、本人の榮達を妨げるわけにはゆかぬといつて、皆同意をして呉れた。併し、それがいよいよ實現したのは、翌四十年の六月であり、殖産局農商課勤務の身となつた。地方廳から中央舞臺に乗り出す機會をつかみ得た、筆者の喜びはひと通りではなかつた。然るにその喜びも東の間、その後の不平は彰化時代の比ではなかつた。『向上の意氣に燃えてゐる者は、どこに行つても不平は絶えないぞ』と教へられたN博士の教訓が、ひし／＼と身にこたへた。従つて今となつては、もう自分の不満や、もだえを博士に訴へることが出来なくなつた。

成る程さうだ、この不平、この不満を克服してゆくところに、人生の向上發展があり、人間としての修養があるのだと考へながら、たゞ黙々として努力をつゞけた。

それから二年後の明治四十二年五月には、獨逸に二ヶ年間留學を命ぜられ、再び學生々活に復歸することになつた。この留守中に臺灣官界に大異動が行はれ、民政長官初め多くの局長達が内地から乗り込んで來た。

留學の満期と共に、更に六ヶ月間の視察旅行を許された筆者は、歸路をアメリカにとつた。丁度その頃N博士は交換教授として滯米中であつたから、ニュー・ヨーク着の翌日直ちに面會することが出來た。『君！臺灣官界も大異動があつた。今度の人達は、事務に練達な人材揃ひだ、併しポリチツクのきらひな人達ばかりだ。君も歸つたら今までの様な氣持で、ポリチツクを論じちゃいけないぞ』……これがニュー・ヨークのホテルで博士から聞いた最初の言葉であつた。さうして、筆者は『臺灣も大分空氣が變つたんだな——』と考へながら、旅をつゞけたが、明治四十五年の五月には再び臺灣に歸り、相變らず殖産局に勤めることになつた。

歸朝直後、臺北の料亭梅屋敷で、來臺中の古在博士を主賓とする學士會が開かれた。然るにその席で意外にも『おドビンさん』で有名な十九丸が、今では琴之助と改名し一流の立派な藝者に成りすましてゐるのに出會つた。さうして過ぎにし年の臺中に於ける教訓の當夜を追憶して感慨無量であつた。

それから半歳もたつたかと思ふ頃、今度は琴之助が綺麗さつぱり、斯界から姿を消してしまつた。『矢つ張りあの女も心掛けがよかつたのだな——』と考へながら、筆者は更に働き續けた。さうして『一體俺は、何時臺灣の官界から足が洗へるだらう?』と思つて見ることも、度々であつた。

それからの臺灣生活十年間は、いはゞ、不平と不満との連続であつた。併し筆者は、その間に極めて貴い修養が出來た。さうして、それによつて收獲し得たものは『忍耐』と名づくる大きな果實であつた。この尊い體驗を以て臨めば、世の中には、恐るべき何者もないといふ自信が出來たやうな氣がして來た。即ち筆者が、平靜なる官界に舟を乗り捨て、波瀾多き政界に駒を進むるの決心をしたのもその結果であつた。

然るに大正十三年の總選舉に出馬すべく、退官を願ひ出でたところ、内田總督は、どうしても、それを許して呉れようとはしなかつた。『君のやうな純眞な氣分で役人生活をして來たものが、俄かに政黨界に飛び込んで見たところが、陣笠扱ひを受けて我慢出來るものでない』といふのがその理由の要點であつた。併し筆者は『その御心配なら私に自信がありません。臺灣十八年間の雌伏によつて得た私の忍耐力は微動だもしないつもりです』といつて無理遣りにやめさせて貰つた。

幸にして當選、爾來正に十年、今日依然として陣笠生活に何等の不满なく、だまつてやつて行ける所以のものは、N博士教訓の賜である。それにしても、その時の教材になつた二人の女性は、今どうなつてゐるだらう。恐らく夫に對しては妻として、又子供達に對しては母として、立派にその任務を果しながら、何等の不平不滿なき朗かな人生を營んでゐることであらう。

三十年前の思出

筆者は、今四國の旅を終へて東上特急列車富士を米原驛に乗り捨て、直江津行の列車に乗り換へ糸魚川行の途中にある。明三十日同地にて開催の三縣聯合教育大會で講演するのが、その目的である。

久しぶりにこの線路をとつた筆者は、初めてこの地方の旅を續けた三十年前のなつかしき思出が次から次に浮んで来る。その思出の二三をこゝに書き綴つて見る。

明治三十七年の九月初め、來年は札幌農學校を卒業するといふ筆者は、植民政策を専攻し、卒業論文として『農業植民論』を物することゝなつてゐたから、北海道移民を多く出してゐる北陸諸縣の農業状態——移民の動機——等を調査すべく行脚の旅に就いた。

岐阜驛から筆者が乗り込んだ下り列車には召集令を受けた兵士達を以て充満されてゐた

——いふまでもなく、時は日露戦争の眞最中であつた。——さうして各停車場毎にそれ等の勇士達は村人の揚げる萬歳の聲に送られながら元氣よく立つてゆくのであつた。沿線の野良に働いてゐる百姓達は老いも若きも、男も女も働くその手を暫時止めながら熱誠込めた萬歳の叫びを以て過ぎ行く列車を送るのであつた。この國民を擧げての眞剣な風景に親しく接した筆者はたゞゞ感激の外はなかつた。さうして遙かに滿洲の戰場を思ひ浮べながら、勇士達の武運長久をひたすら祈りつゞけた。

聽て列車が米原に着くと筆者は北陸線に乗り換へた。而も車窓から眺むれば、今そこに着いた上り列車には白衣の負傷兵が一杯に乗つてゐる。

この白衣の勇士達も、嘗ては國民歡呼の聲に送られて、勇ましく出征した人達である。して見れば今の列車で元氣よく立つて行つた兵士達も聽ては、かうした白衣の勇士となつて再び祖國に還つて來ることだらう。……否その中には彼等の尊いしかばねを空しく戰場の月にさらす者も多からう。併し何事も國家の爲めだと思ふとき、筆者の胸は感謝の涙で一杯にならざるを得なかつた。

間もなく、上り列車から乗り換へて来たお客で筆者たちの列車は一杯になつた。さうしてこゝにも筆者は、人間生死の問題を靜かに考へて見なければならぬ場面に出會つた。それはこの列車に乗り込んで来た母娘三人の身の上である。

即ちその中の姉娘と思はるゝ十八ばかりの娘さん、病にやつれてあほざめたその顔にも尙ほどこかに處女の美しさが窺はれる。胸にこみあげて来るセキ、引つきりなしに出て来る啖、その苦しさをいたはつてやる母と妹、二人の顔には憂ひの雲がたゞよつてゐる。：胸を病む娘、京都邊の名医に診察を受けに行つた歸りらしく想像した筆者は、ひたすら同情の念に堪へなかつた。

病と闘つて死ぬのも人生だが、又敵と闘つて死ぬのも人生だ。死に二つはない、病と闘つて、それに打ち勝たんとする彼女、死なせ度くはない、何とかして病に勝たしてやり度いものだと考へた。併し人生一度は死なねばならぬ運命だとするならば、病に死ぬよりは戦ひに——正義の爲め、平和の爲めの戦ひに——死ぬのが人生の本望ではなからうか。

病める女と出征の勇士、筆者はこの二つを結び付けて死の問題を眞面目に考へつゞけてゐると、聽て列車は武生驛に着いた。さうして三人の母娘はこゝから下車してしまつた。其後この氣の毒な女性の運命が、果してどうなつたか無論知る由もなかつた。

福井、石川兩縣の調査を終へて、富山に向ふ汽車中、縣境に近き停車場に停車中の出来事。『アリの實！ アリの實！』といふ賣子の呼び聲を聽いた筆者は、てつきり、此地方特産の果物だらうと考へた。農學生が、そのアリの實を知らんで素通りをしたでは學に忠なる所以でないと考へ車窓から首をつき出して『おい、アリの實を一つ呉れ』といつた。ところが賣子の差し出した果物は、まがう方なき梨であつた。『何だアリの實つて梨のことか、梨ならいらんよ』といつて賣子に面喰らはした。おはづかしい話だが實際その時まで、筆者はナシの實をアリの實とよぶことを知らなかつたんだから罪がない。

夕方富山に着いた。驛の巡查君に『縣廳に用があつて来たのだが、宿屋はどこがよいか』と教へを乞うた。そして巡查君の教へるがまゝに、縣廳前の△△館に投じた。

夕飯が済むと間もなく、女中がやつて来て『旦那さん、ぼんやりしてゐても、仕様がありません、一つ「東」にいらしつてはどうです』といふ。

「いや、僕は東から来たんだよ、これから段々に北に行くんだよ」戲言いつちやいけませんよ、今着いたばかりのお客様が、どうして東にいつて来る暇なんかあるもんですか」といつてなか／＼承知しない。「うそぢやないよ。東方の東京から来たんだよ。これから新潟に行き用事が済めば札幌の學校に歸るのだよ」と説明すると、女中さんすつかり面喰つた様な面持で「では、旦那様、まだ學生さんですの、妾はまたヒゲなんかはやしてゐらつしやるから、奥様もあれば、お子様達もあるんだと思ひ込んでゐました。これは失禮、おほほ」と笑ひながら下りて行つてしまつた。その晩筆者は狐につまゝれた様な氣持で間もなく寢に就いた。

翌朝、食事の時「一體「東」といふのは、どこのことだ」ときいて見ると、女中さん平氣な顔をして「遊女街ですよ」との答。今度は筆者の方で思はず吹き出した。桑原々々。

富山縣の調査を終へて伏木から船で直江津に渡つた。海岸から人力車を驅つて直江津驛前の×××旅館の支店に行つて見ると、紫の幔幕を引廻して國旗が揚げてある。祭日でもないのに變だなあと思ひながら門を這入ると、羽織、袴に扇子を持つた番頭が出て来て、

「お泊りでせうか」とたづねた。無論泊り度いのだと答へると、今度は番頭の奴「折角で御座いますが、今日は〇〇侯爵が御泊りになることになつてゐますから、本店の方に御出を御願ひ致します」と意外な返答、幔幕のいはれもそれで解けた。

侯爵が何だ、人爵が何だ、俺は無論一介の貧書生に過ぎないが、併し俺には人爵よりも尊い天爵があるぞと考へると腹の蟲が承知しない、「いや〇〇侯爵のお泊りを理由として、わしを泊めないといふなら、わしにも考へがある。何も海岸まで逆戻りまでして、君のこの本店に泊る必要はない、わしは他の宿屋に行くよ」ときつぱり、はねつけてしまつた。驚いたのは番頭「それでは一寸御待ちを願ひます」といひながら奥に這入つたが、今度は「まことに失禮申上げました、どうぞお泊りを御願ひ致します」と頭を下げた。

斯くてそこに一泊翌早朝新潟に向けて出發した。その時の不愉快であつたことは、今でも忘るゝことが出来ない。侯爵と學生、たゞそれだけでは身分上雲泥の相異があるかも知れぬ。併し彼も人間なら俺も人間だ。旅に出て宿屋を必要とする點に變りはない。然るに宿屋ともあらうものが人間に差別をつけるのは、けしからんと憤慨した筆者は、その日の

日記に『侯爵は既知数だが、學生は未知数だ、その未知数な俺の將來を見てゐろ』と書き誌した。……時は流れて正に三十年、若人の意氣に燃え切つてゐたその頃の我身を追憶して感慨無量である。

汽車の進むに従ひ、思出は更に思出を生み、次から次に當時の記憶を新たにするものがある。併し書けば果てしがないから、この邊で筆を擱く。

——昭和八・九・二九——

馬鹿をみた話

僕は元來自分でスポーツをやるのは嫌いだ。従つて少年時代から、スポーツに勝つたことがない。然るにスポーツ嫌ひの僕が、一生一度の勝利を得た話がある。

明治四十五年の春、僕は桑港出帆の春洋丸に身を托して祖國への旅を急いだ。或日船中で運動會が催されたが、日本人の船客が少いので、僕までも無理やりにプログラムの中に組み入れられた。そのうちに『煙草競走』といふのがあつた。

この競走は男女それ／＼一對になつて競走をするのであるが、僕の相棒になつた女は若い美しいアメリカの女であつた。向ふ側にズラリと女達が立ち竝んでゐるが、彼の女達はそれ／＼マツチを手にして待つてゐる。さうすると男達は巻煙草を口にくはへながらアンパイヤーの相圖でスタートを切つて、走つて行つて相手の女から煙草に火を點じて貰つて

更にスタートを切つた線上まで走つて歸つて來るのである。

事務員の一人が、僕にコツソリ敷島を一本呉れた、さうして『西洋煙草は火つきが悪いが、日本煙草は火つきがよいから得ですよ』といつた。かうした祕密のお蔭げもあつたらうが、不思議にも僕が第一着といふ破天荒の成績を挙げた。つまらぬことではあるが、勝つて見ると悪い心持はしなかつた。何事に限らず『勝利』はうれしいものだ。

夜に入り食後、社交室で賞品の授與式が行はれた。無論僕も一等賞が貰へるものだと思ひ込んでゐた。然るにいよゝゝ順番が來て『煙草競走第一着△△嬢』と呼び出し役が、僕の相棒の女の名前を呼び上げたが、僕の名は更に呼び上げない。△△嬢はうれしさうな表情をしながら賞品を受け取つた。

式が終ると△△嬢は僕の傍にやつて來て『ホントに有難う、お前の御蔭で名譽の一等賞が貰へた、男といふものは親切なのだわね』といつた。何が親切だ、ホントに馬鹿々々しい。六尺の大男が女の犠牲に使はれ汗だくくくで走つたかと思ふと腹も立つ。併し考へて見ると、それが世の中だ。勝利者の蔭には何時もかうした多くの犠牲者が潜んでゐるのだ。

犠牲々々、世の中は我等に向つて常に犠牲を要求してゐる。

様の下の方持ち！喜んで犠牲になる決心こそ、今日の行詰つた日本を打開する上に最も必要な要件だ。

賞品を貰つた女の誇よりは、その女に賞品を呉れてやる努力をした男の汗の方が遙かに尊い。馬鹿をみた話でも考へ方によつては、貴い教訓の材料になるから面白いではないか。

『花』は美しい。併しその花を咲かすものは『根』である。その根は土深くかくれて人目にはつかぬが、花散りし後も、雪降る冬の日も地中にもぐりながら、來ん春に花を咲かすべく努力してゐる。

世間では花になり度い人ばかり多くて、根にならうとする人が少い。『俺が』といふ人は極めて多いが『俺に』といふ人は至つて少い。そこに現代日本の行詰がある。今は春だ、花の眞盛りだ。花を観る人達よ地中に根あるを忘る勿れ！

僕のステツキ

僕が詰襟の學生服を背廣服に改め、世の所謂紳士の仲間入りをした當初のことであるから、かれこれ三十年も前のことである。或懇意な中學校の初年生の一人にステツキの話をすると、その子供が『小父さん、ステツキのほんとの發音はステツクでせう』といった。成る程原語の發音はその通りだ。併し吾々日本人にはステツクよりも、ステツキの方が親しみ深く感ずる。

ステツキを日本語に翻譯すれば『杖』といふのだらうが、杖といふと何となく老人の持物の様に感じられてならない。ステツキといへば如何にも若者にふさはしい潑刺たる氣分をたゞよはす様な氣がする。僕は鹿兒島の産であるが、僕等の子供の時分には、ステツキのことを『ボクト』といったものだ。その頃はどんな字を書くのか知らなかつたが、恐らく

『木刀』と書くのであらう。即ち木刀そのものが、ステツキであるのだが、そこに武の國薩摩の氣分が多分に窺はれる。

そんな風に詮議立てをすれば果しもないから、この位にして置くが、兎に角、ステツキは今日では立派に舶來の日本語になつてゐるから、少しばかりステツキに就て思出を書くことにする。

或外國の心理學者が『ステツキは臆病者の武器だ』と論じてゐるのを讀んだことがある。併しステツキの携帶者必ずしも臆病にあらず、亦ステツキを持たぬ者必ずしも勇者とは限るまい。

僕の社會生活は臺灣の腰辨に始まつた。明治三十八年の七月に札幌農學校を卒業した僕は、翌年初めて臺灣の役人になつた。學生々活から役人生活にはいつたのだから、ひとかどの紳士になつたつもりではあつたが、ユニホームに身を固め、短劍をぶら下げるといふ植民地の役人生活には、無論ステツキの必要はなかつた。

然るに明治四十二年に獨逸留學を命ぜられ、長途の旅を終へ、ベルリンに到着したの

が、八月の末日であつた。今でこそツェッペリンの飛行船が日本までも飛んで来る時代になつて、何も珍らしいこともないが、その頃はさうではなかつた。丁度ツェッペリンの飛行船が、フランクフルト・アム・マインから、初めてベルリンに飛んで来るといふので、狂喜したカイザーは、自ら自動車を乗り廻して、ウンター・デン・リンデンに集つてゐる民衆に對し色々の情報をふれ廻つたといふ、その日の翌日であつたから、ベルリンはツェッペリンの話でもち切りの有様であつた。

アンハルター・パンホッフに僕を迎へて呉れた川村麟也君——現新潟醫科大學教授の川村博士——は、その翌日先づ第一に近所のステツキ屋に僕を連れて行つた。『ステツキは獨逸に於て必ず紳士の持つべき必要品だ。故に君は先づステツキを買つて紳士としての要素を具へなければならぬ』といふのが、川村先輩の説明するところであつた。而も僕の買つたステツキには、偶然にも臺灣總督府のマークと同一の銀製のかざりがついてゐたので特になつかしく感じた。

成る程獨逸人は古いも若きも、猫も杓子も、ステツキを携帯してゐる。『犬も歩けば棒に當る』といふ氣分のするのが、ベルリンの往來だ。獨逸は紳士の國であり、同時に臆病者が世間體を誤魔化すには持つて來いの國柄だ。

川村君の意見によつて買ひ込んだ一本のステツキ、それを携帯することによつて、僕の紳士としての資格は立派に出来上つた。さうだ、まことに安直に出来上つた。この安上りの俄紳士が滯獨二ケ年の間、臆面もなく紳士氣取りで街頭を闊歩したんだからたまらない。今から當時のことを考へると、一寸吹き出し度くもある。

その頃在留の日本人が酔狂の餘りカフェーでステツキを振り廻した話や、犬に吠えられてステツキのお世話になつた話等をすれば、數限りもないことであるが、餘り名譽な話でもないから一切省略する。

獨り獨逸に限らず、一體に歐羅巴ではステツキが目立つて見える。そこに僕等は舊世界の世相を窺ひ知ることが出来る。

獨逸二ケ年の留學を無事に終り、更にイギリス及イギリス人の研究も一通り出来たから、今度は大西洋を越えて、アメリカに渡つた。『處變れば品變る』こゝに來ると、ステツキは

もう紳士の必需品ではない。

老いも若きも、ステツキ無しの空拳で、天下を堂々と闊歩してゐるのが、アメリカ人の誇りだ。そこに『國』としてのアメリカの新しさと、『人』としてのアメリカ人の若さを發見する。『ステツキが何だ、あれは世間體を誤魔化す臆病者の持物ではないか』『どうせ持つのなら、ブラオヤハンマーの柄でも握れ！』といった様な面魂で、一步々々大地を強く踏みしめながら歩いてゐる街頭のヤンキー達を見る時、そこに『總ての國民が大統領にもなれるんだ』といふアメリカ人そのものゝ、旺な心意氣を窺ふことが出来る。

古い國のヨーロッパと、新しい國のアメリカ。かうも氣分の違ふものと考へた瞬間、僕はこの身の若さに氣がついた。『僕はまだ若いんだ、同時に僕等の祖國日本も、まだ若いんだ！』『一體ステツキが何だ、紳士が何だ！』僕は思はずもかう叫ばざるを得なかつた。

ステツキを紳士の必需品と認めないアメリカ、飽まで若い氣分のするアメリカ。そのアメリカ大陸に最後の別れを告げ、祖國の靈山富士を夢みつゝ、船出するの日が來た。さうして最愛のステツキを葬るべきの日が來た。

僕はサンフランシスコ出帆後間もなく、二年有半の間この身を紳士として資格付けて呉れた、あの大事なステツキを春洋丸の甲板上から太平洋の眞只中に惜氣もなく水葬してしまつた。斯くて再び『紳士より野人に』さうして『臆病者から勇者』に甦つた僕は、若人としての熱き血潮の高鳴を感じつゝ、輝かしい祖國への平靜な航海を續けた。

外遊三年、再び臺灣に歸つて來たのは明治四十五年の五月の初めであつた。それから十三年の間、ユニフォームに身を固めつゝ、依然としてステツキなしの役人生活を續けた。

或年のことである、南洋はハルマヘラ島に奮闘努力を續けてゐる江川俊治君が、歸朝の途次、臺灣を訪問せられたが、その際南洋産の黒檀で作つた、ステツキを寄贈せられた。未製品ではあるが、あたまのところを、『にぎりこぶし』の彫刻になつてゐる。その『にぎりこぶし』が、亦如何にもよく出來てゐる。孤手空拳南洋の天地に自己の運命を開拓し、國運の進展に資せんとする若人の熱烈な意氣を表現する意味に於て、僕はこのステツキを非常に愛した。然るに制服にステツキは無用、依つてこれを郷里の老父に贈つた。父の喜びは一通りではなかつた。

昭和元年十二月二十八日の夕刻、父は輕き腦溢血にかゝり、歩行の不自由を感じるやうになつたが、爾來昭和三年四月三十日、八十二の高齡を以てこの世を去るに至るまで、片時も身邊からそれを離れたことがなかつた程、このステツキを熱愛した。父のこの心持をよく察してゐた母は、特にこのステツキを棺に納めて葬つた。僕は今でも時折、父がこのステツキを頼りに不自由な足を引きずりながら、歩いてゐた頃の姿を思ひ出しては、父在天の靈に幸あれと祈つてゐる。

話は少し後に戻るが、僕は、大正十三年の總選舉に政界入りを決心し、退官を斷行することになつた。従つて過去十有八年の長きに亘り、かぶり續けて來た制帽をかなぐり棄て、自ら陣笠の紐を結ばねばならぬ日が到來した。

在臺十有八年、この間、何かと面倒を見てやつた若人も少くはなかつた。その若人の一人であつた上山君が、その頃漸くはやり出した臺灣の名産『蛇のステツキ』を饒別に呉れた。上山君はいつた、『蛇のステツキは御迷惑かも知れませぬ。併し私の志です、御受け下さい』僕は若人の厚意を心から感謝しながら、それを東京に運んで來た。近頃は技術が進

んで蛇のステツキも餘程奇麗に出来るやうになつたが、その頃はそこまでは行かなかつた。まことに氣持のよくないステツキだ。臆病者の武器どころか、勇者といへども、一寸手の出ないやうな氣分のするステツキだ。

併し若人の折角の厚意を空しうする譯には行かぬ。『さうだ、政治家は清濁併せ呑むの度胸が必要だ、その修養にこのステツキは持つて來いのしろ物だ、うんとこれを利用しよう』かう決心した瞬間に、今まで薄氣味悪く感じてゐた蛇のステツキが俄かに親しみを感ずるやうになつた。斯くて十三年ぶりに再びステツキを持つ身となつた。若人の志を空しくしない爲めに、さうして政治家としての修練を積まんが爲めに！

自分で蛇のステツキに親しみを感ずるやうになつてから間もないこと。今は故人となられた愛甲兼達氏が同郷の先輩であるので、臺灣からの歸途、大阪に訪問の上、蛇のステツキを贈つた。さうして『どうですか、御氣に入りさうですか、一寸御覽下さい』といつた。袋から出して見た愛甲先輩は『いや、これはどうもえらいしろ物だ、一寸吾輩には持つてさうもない』といつたが、そこは實業界の先達丈けあつて次の瞬間には、もうすつかり變つ

てゐた、『折角の御厚情有難う、美事なものだ、君が代議士當選の記念にするよ』といつて喜んで收められたが、果してこのステツキをその後どう處分せられたか、つい聞いて見ないうちに逝かれてしまつた。……併し變り種子の贈り物は餘程注意をしないとよくないことだけをこゝにつけ加へて置く。

その後間もなく『陣笠生活にステツキは不用だ』といふ氣分がして來た。さうして何時の間にか再びステツキなしの生活に復してしまつた。

或日富山市の政談演説會に出かけたことがあつた。同行の中林友信代議士——今は故人となつた——が、ステツキ携帯のまゝ會場にはいらうとした。すると入口警戒中の警官が『もし〜棍棒を持つたまゝ這入つてはいけません』とがめた。中林君のステツキは、嘗て同君が九州遊説の折、或老人が、その演説にすつかり惚れ込んで祕藏のステツキを贈つて呉れたのだといふ同君自慢の奴だ。そのステツキを警官が棍棒呼ばはりをしたので、同君眼を丸くした。さうして持前の諧謔混りの大阪辯で『こりや棍棒ぢやおまへん、ステツキだんが、おまけにわしは辯士ぢやよつて、大事おまへん』といひ棄てたまゝ、さつさと奥の方に消えて行つてしまつた。

僕はこの喜劇を見て、思はず吹き出した。棍棒！ 何といふいやな感じのする言葉だらう。棍棒！ 壯士！ さういふ言葉は如何にも暴行の代名詞であるかの如き響を感じる。

こんな感じのよくない言葉は我國の政界から速かに葬り去つてしまひ度いものだ。それにしても細身のステツキでも棍棒呼ばはりする者の非常識を、何とかする工夫はないものか。

昭和二年の秋であつた。選挙區の遊説を終へて久しぶりに東京へ歸つて見ると、新渡戸稻造先生が病氣靜養中だといふので早速病床に見舞つた。過去八年の間ジネヴに於ける國際聯盟の爲め最善の努力を爲し、任滿ちて最近歸朝せられた先生は、病中にも係はらず我國政治の現状を痛嘆せられた。聽て先生は『君はステツキを使ふかね』ときかれた。『或酒飲みを批判した歌に「飲めば飲み、飲まねば飲まぬこの男、買うては飲まぬ、飲ますれば飲む」といふのがあります、私のステツキも「持てば持ち持たねば持たぬこの男、買うては持たぬ、持たすれば持つ」と、いふ奴でせう』これが僕の答であつた。

『随分うまいことをいふではないか、それではこゝに二つのステツキがある。その一つは

自分が使ひ古した奴だし、他の一つはジャヴァ産の珍木で出来てゐる。併しこの方は未製品だからステツキ屋にやつて完成させなければならぬ。選擇は君の自由だ、どちらでも好きな奴を持つて行き給へ」：先生はかういはれた。

『先生にこの上ステツキ完成の費用を出していただくのは忍びませぬ。それはともかく、僕はその古いのを頂戴しませう。先生が八年の間ジネヴで使つてゐられたその古いステツキこそ正に「平和の杖」です。今日の政治家にはふさはしいステツキです」：僕はかういひながら、特に古い方のステツキを所望して歸つて來た。

『平和のステツキ！』僕はそれ以來このステツキを携帯することによつて、常に自分の理想を明瞭に意識してゐることの便を得てゐた。僕は植民政策の研究者であり、海外發展の熱心な主張者である。併しそれは侵略主義でも軍國主義でも、また帝國主義でもない。僕の理想とするところは、神武天皇御東征の際『天業を恢弘し、天下に光宅せん』と仰せ出された、その大理想に出發してゐるのである。

即ち天業とは、今日の言葉で以てすれば精神文化の建設であつて、この精神文化を普く全世界に押し廣め、全人類の幸福を平等に増進し、以て全世界の平和を招來せんとするのがその目的である。故にそこには神の畫ける天上の理想を我等日本民族の手によつて、これを現實の地上に移し、以て世界平和の大殿堂を建立すること以外に何等の目的がない。これが我等の主張する植民政策であり海外發展である。即ち僕は『平和のステツキ』と共にこの大理想を抱きながら、常に天下を濶歩して來た。併しその心持は嘗てベルリンの街頭を濶歩した當時の淺薄な心持とは全然異つてゐることはいふまでもない。

斯くてそのステツキを携へながら引續き各地の遊説にも出かけたが、未だ一度も警官の棍棒呼ばはりに出遭つたこともなかつた。それはこのステツキから常に平和の光が輝いてゐるからであらう。

『平和のステツキ！』古いステツキに新しい理想を宿らせて進むところに、僕は一種の誇を感じず。さうして自分がこのステツキを以て指すとき、自分の進んで行く前途には常に坦々たる平和の大道が開けて來るやうな氣持がする。

『平和のステツキ！』それは決して臆病者に持たしてはならぬステツキだ。さうだ、それ

はたゞ勇者のみが持たねばならぬステツキだ。

新渡戸先生は常に太平洋の橋を以て自ら任じ、國際人として最後まで努力された。昨秋カナダに客死せられた先生を思ふとき、僕は過去二十七年の長きに亙り、親身も及ばぬ御指導を受けたことを感謝せずにはゐられない。さうして今や『平和のステツキ』は先生の形見として永久に僕の手に残ることになった。

併し僕が新渡戸先生にステツキを貰つたのはこれが最後ではあつたが、決してそれが最初ではなかつた。

明治三十九年の二月初めて先生に連れられて臺灣に赴任した僕は、その翌年の五月に新家庭を作つた。結婚の當夜東京を立つて歸任の際、我等若き二人を新橋驛に見送つて呉れた先生は、發車間際に一本のステツキを僕に手渡ししながら『これは結婚の記念に僕からの贈り物だ。併しこれは決して妻君をなぐる爲のステツキではないんだよ』といはれた。

一しよに送りに來て呉れた先輩達が、これを聞いてクス／＼笑つたが、その意味が解らなかつた。聽て汽車は發車した。よく見ると、このステツキは中がうつろになつてゐて、

洋傘が仕込んであることを發見した。……そこで初めて先生が、『妻君をなぐるステツキでないよ』といはれたのは、『二人が仲よく暮す爲めの相合傘だよ』との意味であつたことに氣がついた。併しそれは汽車がもう横濱邊を走つてゐた頃であつた。

新渡戸先生はなか／＼のユーモリストであつたが、この一事にも先生得意のユーモアが遺憾なく發揮されてゐる。併し今日となつては、かうした先生の氣持ちよいユーモアは、再び聽くことの出来ないことになつてしまつた。

ステツキに關する新婚當時の思出！ これは決してサイノロの暴露ではない。それは、たゞ恩師をなつかしむ僕のいつはりなき心の告白である。

——昭和九・五・九・特急富士にて——

四人の『東郷實』

學士會の會員氏名録の末尾に同氏名者が再録してある。而もそれが四六倍判七ページの多きに互つてゐる。その中には『高橋一郎』といふ人と『林茂』といふ人が各々七人も居り、『岡田實』といふ人が六人もある。四萬人の會員中にこんなに多く同氏名の人があるとするならば、九千萬國民の中にはどれだけ同氏名の人がゐるかわからない。さうして、それが色々の混線を來し、種々の悲喜劇を演ずるのだから人生は面白い。

僕の知つてゐる範圍だけでも東郷實が僕の外に三人もある。而も四人の『東郷實』が悉く鹿兒島人と來てゐるから、やゝこしくてたまらない。

僕が郷里の小學校を卒へて、東京に出たのは明治二十七年の五月、丁度十四歳の春であつた。その翌年、中學の二年頃、僕は麻布北新門前町の岩切といふ小父さんの家に下宿し

た。ところがその親類に『東郷實』といふ尋常科の生徒がゐた。よく遊びにやつて來たので、二人の『東郷實』がすっかり仲良しになつてしまつた。

小母さんが『實さん』と呼ぶので僕が『ハイ』と返事すると、『いや、小さい方の實さんだつた』といふかと思ふと、今度は僕の方を呼んだのに小さな方の實君が『ハイ』と返事する等、吹き出す様な滑稽を演じたことも一度や二度ではなかつた。併しその後間もなく岩切一家は鹿兒島に引き上げ、僕も他に轉じたのでそれつきり、この『東郷實』君と會ふ機會がなくなつた。従つて同君その後の消息を知る由もないが、今でも時々その當時を思ひ出しては一種のなつかしき感する。

故東郷元帥の二男に『東郷實』君がある。丁度世界大戰の頃であつた。當時臺灣總督府に勤めてゐた僕は、或る日臺北の鐵道ホテルに、折から基隆入港の軍艦乗組みの青年將校達を午餐に招待したことがあつた。

その際僕の名刺を見た一人の將校が、不思議さうに僕の顔と名刺とを見較べてゐるから、僕が『あなたは海軍の東郷實君を御承知でせう』と切り出した。するとその將校が『ハイ、

私は東郷實君と兵學校の同期生であります』と答へた。さうして更に『私は海軍の東郷實君がこんなところに來てゐる筈はないと考へたのであります。果して別な東郷實さんでありました』とつけ加へた。

いふまでもなく、海軍の東郷實君といふのは元帥の二男『東郷實君』のことである。

大正十年の五月、京城の朝鮮ホテルに滯留中、或日ボーイが訪問客の名刺を取り次いだ。さうして『お小さい時分にお目にかゝつた切りですから御記憶がないかも知れぬ』といつておいでになりました、とボーイはいつた。どう考へて見ても記憶のない人ではあるが、會ひ度いといふ人だから部屋にお通しした。

その人は部屋に這入つて來るなり『あなたが實さんですね』と念を押した。『さうです、私が東郷實です』と答へた。その人は更に言葉をつゞけて『私はあなたの極くお小さい頃、お宅に書生に置いていたゞいたものです……』と語り出した。

そこまで聽いて僕は變だなアと考へた。僕は十四歳まで郷里にゐたが、農村の生活に書生等のある筈がない。ハハア……これは東郷元帥の二男實君と間違つてゐるのだなと思つ

た。そこで『一寸待つて下さい。あなたは東郷元帥のお宅にゐられた方なんでせう』といふと『その通りです、あなたは元帥家の御二男でせう』との反問。

『いや、僕は元帥の二男ではありません、全く別人の東郷實です』といつてもなか／＼承知しない。『そんな筈はありません、今朝の新聞に、あなたが東拓支社で講演なすつた事が出てゐましたから、念の爲め東拓へ聞き合せましたが、矢張り元帥の御令息ですとの返事でしたから、間違ひはない筈です。』『東拓が何といはうと、私自身のいふことが一番確かです。私は東郷實彦の長男で、斷じて元帥の二男ではありません』……

『さうおつしやればあなたは農學博士だといふし、元帥とこの實さんは海軍に行かれたとも聞いてゐる。それでは矢張り違ひますかなア』と嘆聲を漏したのが最後の落ちであつた。『無論ちがひます。併し僕も鹿兒島です、かうしてお出でになつたのも何かの奇縁、まあゆつくり遊んでおいでなさい。』かういひながら、後は夜の更けるまで雑談に耽つたこともある。

先年關西の或市に居住してゐる相當年輩の方——無論未知の人だ——から僕の揮毫を需

めて来たので悪筆ながらそれに應じた。間もなくその仁から新年の書初めだといつて立派な『名門出名士』といふ書が送つて来た。さうして手紙には、出来るなら只の一字でもよいかから御尊父元帥の御染筆を願つて呉れないかと書いてあつた。

無論僕を元帥の子供だと思ひ込んでの頼みだ。そこで僕は『元帥の身内の者ではありません。せぬ、従つて名門でもなく名士でもありません。御揮毫は有り難く頂戴致します。また御下命のことは機會を見て元帥にお頼みしてあげます。』と返事したこともあつた。

更に先年植原悦二郎君の選挙區に演説に行く約束をしてゐたが、風邪發熱の爲に井上孝哉氏に代つて行つて貰つた。ところが植原君歸つて來ての話が面白い。『君は菊作りの名人だといふぢやないか。選挙區の連中が、君に自慢の菊を觀て貰はうと待ちかまへてゐたのに、君が來なかつたといふので皆失望してゐたよ』といふ報告。

東郷元帥の長男彪氏は菊作りの名人と聞いてゐる。さうして二男が實君、僕は百姓の學問をした『東郷實』、それ等の事實がこんがらがつて、信州の諸君が僕を元帥の子供と考へ、菊作りの名人と思つたのも無理がない。併し僕はこの話を聴き、自分が農業技術の頗ぶる

あやしい農學士であることを顧みて恥しく思つた。

こんな風の間違ひを書けば數限りもない。殊に外國旅行中到るところで元帥の子供だと思はれ、色々の奇談を残して來たことはいふまでもない。ところが最近までこの二人の『東郷實』は面語の機會を得なかつたが、元帥の薨去は圖らずも私達二人に挨拶の機會を與へて呉れた。

去る六月二日の晩、僕はお通夜の爲め元帥邸に向向した。その際元帥家の親類に當る田中海軍中將が、私達二人を引合せ『こちらが元帥の二男海軍中佐の東郷實君、この方が文部政務次官の東郷實君』と紹介せられた。そこで『私が東郷實です、父の生存中は、御世話様になりました。』『私が東郷實です、元帥御存命は何かと御配慮にあづかりました』と互に挨拶を述べた。側でこの光景を見てゐた同僚寺田市正君は『東郷實のはち合せは面白いが、併し時が時であり、場所が場所であるから何ともいへない劇的シーンだつたね』といひながら目をしばたゝいてゐた。

更に五日の國葬には僕は文部省を代表して葬列に加はるの光榮を有した。さうして僕は

お伴をしながら色々の感想に耽つた。

僕の父は元帥と同じ弘化四年の生れであつた。さうして父は元帥と同年であることに一種の誇をもつてゐた。その父が郷里に於て病篤しとの急電に接したのが昭和三年の四月下旬、丁度臨時議會開會中のことであつた。……『歸るべきか、歸らざるべきか』……僕は可なり迷ひ且つ惱んだ。併し父は僕に向つて常に『公人としての義務を果せよ』と教へた。そこで僕は、この場合代議士としての任務を完全に果すことが正しいと考へた。さうして『大義親を滅す』といふこともある、これは歸るわけにはゆかぬと決心した。聽て『父死す』の急電に接したが、葬式萬端親類の人達に頼んで歸らず、悲しみを深く胸に包みながら、喪服のまま登院を續けた。

父病篤きも歸らず、更に父死するとも葬らず、何たる不孝者ぞ。……その不孝者の僕が今元帥の葬列に参加を許され、公けの務めを果すことになつたのだから、僕としては一層の感激を覺える。

同じ『東郷實』でありながら、元帥の二男實君は任地より歸り來て、父君の最期を看護

り、子としての義務を果し、更に輝かしい國葬の儀に臨み、最後の孝行を完全に爲し遂げられた。僕は自分の身に引き較べ、それをうらやましくも思つた。

日頃健康そのものであつた父は『八十八までは必ず生きて見せる』と口癖の様にいつてゐた。然るにこの期待を裏切つて死んだのが八十二歳の春であつた。同年の元帥が本年丁度八十八で亡くなられたのだから、それがまた僕の追懐を更に深くするものがある。而も元帥の葬列には二人の『東郷實』がお伴をしてゐる。その一人は元帥の二男たる『東郷實』君、他の一人は長男に生れながら嘗て父の葬儀を自ら營み得なかつた悲しみを持つ不幸者の東郷實。

父は生前頻りに元帥の書を欲しがつてゐた。僕が國に歸る度毎に『元帥の書だけは是非貰つて置け』といつた。然るに怠け者の僕が、まだ元帥にお願ひしないうちに父は死んでしまつた。それが僕にとつては一つの大きな心残りであつた。

その後間もなく、元帥にこの事情をお話したところ、元帥も快く

『世とともに語りつたへよ國のため命を捨てし人の勳を』

といふ明治天皇の御製と、『勤者興亡者亡、勤怠興亡愈在我存』及び『天必與正義、神必感至誠』と三枚書いて呉れた。僕はそれを早速父の靈前に捧げ、自分の怠慢を御詫びした。さうして元帥の御厚意により暹蒔きながら孝養の一端を果し得たことを深く感謝した。

然るに今や元帥も、既にこの世の人ではないのだ。『元帥の前に元帥なく、元帥の後に元帥なし。』時は非常時、國を擧げて聖將東郷元帥の薨去を悲しむのは當然だ。……こんなやうなことを次から次に考へながら、僕は葬列と共に静かに歩いた。聽て葬儀は日比谷齋場に、いとも嚴肅に行はれた。さうして僕は元帥の英靈永遠に眠らるる多摩の墓地に榮光あれと祈つた。

東京の市電が漸く九段坂に開通して間もない時のことである。九段坂で電車が衝突して多數の負傷者を出した。さうして新聞紙に掲げられた負傷者氏名の中に、鹿兒島縣人『東郷實』といふのがあつた。

その頃臺灣總督府の技師であつた僕は、公用を以て上京し、漸く所用を済ませて退京した直後の出來事であつたから、僕の親類や友人達が驚いたのも無理がない。それはてつきり

僕だと考へ、負傷者『東郷實』君が入院したといふふ神保病院に駆け付けた者も少くはなかつた。

その中に僕の親友で、當時陸軍士官學校の教官をしてゐた野邊平作といふ大尉があつた。大尉は早速病院に駆け付けて、刺を通じた。『どうぞ病室にお通り下さい』といふので、いよいよ以て僕に相違ないと思ひ込んで病室に這入つた。さうして、そこに顔から頭にかけて一面に繻帶を巻き眼だけを出した『東郷實』君を発見した。大尉は友人の『東郷實』は六尺に近い大男であるのに、眼前の『東郷實』は少し小さ過ぎる様に思ひながらも、友人らしい、ぞんざいな言葉で『いやどうも飛でもない目に合つたね』といった。すると相手は『わざわざお見舞をいたゞいて、ほんとうに有り難う存じます』と馬鹿丁寧な挨拶をした。

大尉殿いよ／＼面喰ひながら話してゐるうちに、その『東郷實』君が親友の『東郷實』にあらずして、何かズボンの修繕を頼んだことのある鹿兒島出身の洋服屋さんであることに氣が付いた。大尉は今更間違つて來たともいへず、『それでは御大事に』『これは御忙

しいところを、わざ／＼恐れ入りました」といつた様なことでお茶を濁して歸つて行つた。大尉は早速この失敗談を臺北の僕に知らして呉れた。さうして『見舞のお菓子を買つて行かなかつただけがまだ備けものだつた』と書き加へてあつた。僕が洋服屋の『東郷實』君の存在を知つたのは、かうした悲喜劇のあつた結果であつた。

大正十三年の總選舉に郷里より立候補した僕は、幸にも當選することが出來て居を東京に移した。然るに貧乏代議士の悲しさには、電話を持たなかつた。さうしてそれが二人の『東郷實』を無暗に混線せしむることになつた。：：『もし／＼先生は御在宅ですか』といふ電話が日に何遍となく、洋服屋の『東郷實』君の宅にかゝつて來るかと思ふと僕を訪ねる筈のお客が洋服屋を訪ねるといつた風で、洋服屋の『東郷實』君の迷惑は一通りではなかつた。

ところが、或日のこと女中が目を丸くして『旦那様！旦那様と同じ名前のお客様がお出でになりました』といつて差出す名刺を受取つて見ると、『君と同姓同名の別人東郷實君を紹介す』と書いた同僚藏園三四郎君の紹介名刺が副へてある。これはきつと洋服屋の『東郷實』君だなと思ひながら會つて見ると、果してその通りであつた。

初對面の『東郷實』二人の間には『私は洋服屋です、併し洋服の注文取りに御伺ひしたのではありませぬ。同姓同名も何かの奇縁、今後は宜しく御願ひ致します、』『僕は先年君が電車で負傷せられた時から君の名は聞いてゐた。殊に最近電話で御迷惑をかけてゐることもよく知つてゐる。どうぞ宜しく』といつた様な挨拶が交はされた。僕はその際、何となく十年の知己を得た様な氣がした。

元來鹿兒島の東郷姓は歴史的にいふならば、澁谷東郷といはれ、その祖先は關東平氏である。今の東京の澁谷がその根據地であつて、澁谷重國に出てゐる。重國の子に光重があつた。光重は今の『小田急』の沿線になつてゐる綾瀬村の早川城——數年前にその城址が發見せられた——を領し、鎌倉に仕へて戦功があり、薩摩の國は禰答院、入來院、東郷、高城、鶴田の五箇郷に封ぜられた。光重には六人の男子があつたが、その内の長男一人を關東に残し他の五人を悉く薩摩に下し、それ／＼一郷を分領するに至つたのが寶治二年の春——紀元一九〇八年、今から六百八十六年前であつた。さうして二男早川次郎が東郷を

領し、東郷實重と稱したのが、即ち東郷家の遠祖である。

従つて東郷家は「實」又は「重」を名乗としてゐる。東郷元帥の名が「實良」であるのも、それから來てゐると思ふ。さうして、「東郷實」といふのが何人もあるのは、この名乗から來た偶然の出來事だと考へられる。そこで僕は洋服屋の「東郷實」君に初對面の折その家系に就てたづねて見たが、矢張り澁谷東郷の流れだとの話。して見れば御互の身體の中には、今でも少しは同じ血が流れてゐるのだから、仲良くしようぢやないかといつて別れた。二人の「東郷實」が懇意になつたのはその時からのことである。

洋服屋「東郷實」君の長男豊君が、東京帝大を卒業して林學士になつたのは昭和七年の春であつた。就職難の今日ではあり、僕も就職に就て相談を受けた。「東郷實……但し僕とは別人の東郷實君の長男豊君を紹介す」といつた様な、やゝつこしい書き方をしては諸方に就職の運動をした。ところが幸にも南洋興發の厚意により同社に採用せらるゝことになつた。喜んだのは父親の「東郷實」君であつた。

間もなく、親父さん僕のところへやつて來て、「實は悴の就職に身元保證人が二人必要だ

といふのですが、先生にお願い出來ないでせうか」との相談、「よろしい引受けた」といつて書類に署名した。即ちそこには二人の「東郷實」が仲よく並んだ身元引受證書が立派に出來上つた。世界廣しといへどもこんな奇抜な身元保證書はまたとあるまい。併しそれにしても、どつちがどつちの「東郷實」だか判らないから、姓名の下にお互の身長でも目印に記入して置くかねと、いつて笑ひながら別れた。

豊君は眞面目な、さうして孝心の厚い青年だ。今は南洋のサイパン島で熱心に働いてゐる。子思ひの「東郷實」君は我子の出世に大きな望みをかけつゝ、この上は幸福な新家庭をといふ念願に燃えながら、何時も變りなき努力を續けて居られる。僕はこのうるはしい「東郷實」君の一家に幸あれと祈る。

執筆年月

陣笠の群に入りて……………	經濟往來	大正十五年六月號
展望車と機關車……………	〃	七月號
仁王の草鞋と植民政策……………	〃	八月號
三等に乗りて……………	鹿兒島新聞	九月五日
小刀細工から解放せよ……………	經濟往來	九月號
子兔の悲しい最期……………	〃	十月號
雨の飯盛山から……………	鹿兒島朝日新聞	十月二日
花魁の力……………	經濟往來	十一月號
力一杯……………	〃	十二月號
法律を超越せよ……………	法律春秋	十一月號
シルクハット……………	文藝春秋	昭和二年二月號
模倣から創造へ……………	現代	二月號
ボイス、ビー、アンビシヤス……………	經濟往來	二月號

波を見る先生……………	經濟往來	昭和二年四月號
獨逸の女教師と語る……………	海外	四月號
新政黨の樹立へ……………	法律春秋	昭和二年六月號
一匹の蠅……………	經濟往來	七月號
白髮染……………	〃	八月號
法律と人格……………	〃	九月號
秋空に富士を眺めつゝ……………	鹿兒島朝日新聞	十月十日
共榮亭……………	經濟往來	十一月號
日本は何處へ往く……………	〃	昭和三年一月號
一等國……………	文藝春秋	一月號
彰化一年有半の思出……………	臺灣新聞	一月二日
二つの力……………	經濟往來	五月號
民族的藝術の殿堂……………	鹿兒島朝日新聞	六月十四日
義務……………	法律春秋	七月號
先づその源を清めよ……………	文藝春秋	九月號

精神文化建設の爲に……………	向上の青年	昭和三年十月號
歩きながら……………	經濟往來	十一月號
祖國を救ふの途……………	向上の青年	十二月號
世界的偉人を造れ……………	薩 隅	昭和四年一月號
政界革新の爲に……………	向上の青年	二月號
農村青年とその娯樂修養……………	〃	三月號
財部から東京まで……………	鹿兒島朝日新聞	五月七日
理想なき政治……………	法律春秋	八月號
大人格南洲先生を憶ふ……………	向上の青年	八月號
佐渡ヶ島から……………	鹿兒島朝日新聞	八月十日
忘れえぬ姉……………	雄 辯	昭和五年五月號
二つの思ひ出……………	文藝春秋	七月號
好親却て破れん……………	法律春秋	七月號
倫敦の思ひ出……………	經濟往來	八月號
義人宗吾を憶ふ……………	鹿兒島朝日新聞	九月十日

心と心との問題	政界往來	昭和五年九月號
政治の話	政界春秋	十月號
雪降る日の小鳥	政界往來	十月號
一點の曇	現	十一月號
血の燃える病氣	政界往來	十一月號
稻空しく稔る	政界往來	十二月號
ドロテア	教化運動	昭和六年二月號
先づこの三點から	政界往來	六月三日
その根は深く祖國の土に	政界往來	三月號
帝制華かなりし日	政界春秋	七月號
グレイプ・フルーツ	政界春秋	七月號
文字なき者の教訓	キ	昭和七年五月號
臺南に於ける或日の思出	臺南新報	昭和八年一月一日
友邦たるの心	日滿往來	九月號
二人の藝者	文藝春秋	十一月號

三十年前の思出	政界往來	昭和八年十一月號
馬鹿をみた話	聯合情報	昭和九年五月號
僕のステツキ	現	七月號
四人の『東郷實』	東方之國	十一月號

昭和九年十二月二十日印刷
昭和九年十二月二十四日發行



三等に乗てり

定價 壹圓五拾錢

著者 東郷實

發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社富山房社長

坂本嘉治馬

印刷所兼印刷者 東京市牛込區榎町七番地
日清印刷株式會社

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社 富山房

振替貯金口座東京五〇一番
電話神田(25)自二一七七一
至二一七八番

天

2-3744
 種
 お

富山房懸房山富
 ◆觀盛の史歷民國大三◆

屬推會協館書圖本日

富山房編輯部		富山房編輯部		文學士 下田禮佐		文學士 下田禮佐		著者
兩箭內・羽田文學博士	四村博	箕川・瀨川・浮田	芳賀・上田・幸田	三上・幸田	四上・幸田	高橋俊乘	文學士	著者
村上秀一	柴田親雄	國民西洋歷史	訂增國民日本歷史	國民東洋歷史				審名
定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價參 送料二十七錢	定價・送料

富山房編輯部	富山房編輯部	文學士 下田禮佐	文學士 下田禮佐	著者
外國地理	日本地理	新外國地圖	新日本地圖	書名
定價金壹圓五拾錢 送料金八錢	定價金壹圓參拾錢 送料金八錢	定價金壹圓參拾錢 送料金八錢	定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢	定價・送料

~~619~~ 049
~~255~~ T023

25. 9. 19

終

